

山形短期大学民話研究センター資料叢書

川崎みさをさんの昔話

編 武 田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

川崎みさをさんの昔話

編 武 田 正

川崎みさをさんの昔話

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
猿蟹入	蛇蟹	蛇まじない	テデッポッポ	オッテンタカ鳥	ねずみといたちの寄合田	古屋の漏る	かちかち山	猿蟹合戦	猿と蛙の寄合餅	狐と狸とかわうそ	猫とネズミ
36	32	31	30	28	26	25	20	14	10	7	6
24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
ねずみ浄土(2)	ねずみ浄土(1)	団子どの	兄弟話	二十四孝	孝行息子	子育て幽霊	瓜姫子と天邪鬼	一寸法師	天人女房	蛙の法事	山鳥女房
74	72	65	63	61	61	59	55	50	46	43	42

39	38	37	36	35	33		32	31	30	29	28	27	26	25
文福茶釜	火車	金の斧銀の斧	糠福米福	浦島太郎	笠地藏	掃く音のきらいなじさま	挿粉木の音と	鼻たれ地藏	猿地藏	こぶとり	舌切り雀	福の神	花咲じじい	行けざんさんの梨
119	116	113	108	105	103	102		100	96	93	88	87	80	75
54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40
屁くらべ	糸合図	数の子 ― 南山のおじ ―	枯木見舞 ― 南の山の兄んにや ―	鴛の挨拶	大阪の蛙と京都の蛙	孝行息子の藤六	小倉の狐	化狸と和尚	さとりのお化け	化物寺	化けもの話	鬼と豆のくいくら	三枚のお札	狐むかし
157	156	154	151	150	149	144	142	139	137	134	132	129	126	122

69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55
八月赤子	股大根	マイタケ採り	人柱の話	栃の実の化けもの	八十尋	食われた餅	まんじゅう	かい餅	歌くらべ — 和尚と小僧 —	夫婦と鏡	かくれみの	医者と鍛冶屋	爺婆と黄粉	寝言兄弟

186 184 183 182 181 178 175 174 172 170 167 163 162 160 159

84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
義経と弁慶	岩見重太郎	阿波の徳島十郎兵衛	石堂丸	酒吞童子 — 瞽女口説 —	田の神団子	一休和尚(2)	一休和尚(1)	慶次之介と玉川太郎	手の子の久兄	おりや峠	百子沢	酒田の本間さま(2)	酒田の本間さま(1)	田の草取り

219 217 214 210 209 208 207 206 204 203 200 198 192 191 189

85	鬼神のお松	220	90	てんぼ物語	227
86	紫式部の唄よみ	223	91	果なし話	228
87	菅原道真	224	92	ねずみ経	228
88	御詠歌の昔話（一）	225	93	まま子いじめ	230
89	御詠歌の昔話（二）	226		あとがき	232

川崎みさをさんの昔話補遺

1	牛方と山姥	236	4	長い名の子	245
2	お杉お玉	239	5	田の神団子	246
3	親棄山	243			

凡 例

- 『日本昔話集成』に類話のあるものは、末尾に番号を入れました。
 ○ 手ちがいで34は欠番になっております。従って、収録昔話は九十一話です。
 ○ 転載など利用の方は編者に御連絡ください。

1 猫とネズミ

むかしあつたけど。

お釈迦さまが大病になつて、今にも死になつたど。そこで天竺さ菓とりに行かんねことになつたど。それで、「ネズミがええがんべ」て、そう言わつて、ネズミが使いに立つたど。そして一生懸命で行つてきて、その袋くわえて帰つてきたごんだど。そして、いまちいとお釈迦さまの傍さ帰られつどき、猫、どつからか跳んできて、そのネズミ食つてしまつたど。

それで、お釈迦さまのあれに間に合わなくて、お釈迦さま逝くなられたので、猫は十二支さ、そのために嵌られなかつたど。

「集成 6 猫と鼠」

2 狐と狸とかわうそ

むかしあつたけど。

むかし、小国の村の衆、買い物ものに行くことになつたど。おら家のおつかちやに隣のおつかちやに、そのまた隣のおつかちやに買い物ものに行つたど、正月の。そしてこんど、いっぱい塩魚だの塩だの、砂糖だの、いっぱい買つて来んなねもんだから、年寄衆、みな買つてきたど。子どもたちが迎えに行つたど。

「おかちゃん、ひどがつたべや。こんど、おらだ代つて背負うから降ろせ」
て、その荷物てんでに背負つて呉つたど。そしてこんど、

「おかちゃだ、くたびつたべがら、ゆっくり来い。おらだ行つてつから…」
て、そう言うて、その子どもたち、さつさと消えてしまつたど。そして家さ来てみて、

「みち子、どこき置いだ」

「何や、おかちや、おれ、そんなこと、荷物なて知しやねぜ」

て、こう言うたど。

「何だや、あそこまで迎えにきたでないか、橋のところまで」

「迎えなて行かねぜ」

「隣の、かずえも来たし、裏のちえ子も来たでないか」

て、そう言うたど。

「んでは、狐にだまさつではあ、せつかく買つて来たもの、みな盗ら^とつたなであつたなあ」

て、人たちはそういう風に話したど。そしてその盗つた狐たちは、山さ行つて、分けっこしたど。そうすつどこんど、狐は悪かしこいもんだから、分けかたの親方になつたど。そして、

「かわうそ、かわうそ。お前は年中魚食つてるども、塩気ないど、うまくないべから、お前は塩の方ええでないか」

て、そういうて塩呉つたど。狸は、

「お前はめつたに、おれのような、足も早くないもんだから、穴の中に余計にい

るべから、お前はローソクにしたらええでないか」

て、ローソク呉ったど。そしてあと、自分がええものはあ、みな取ってしまったど。そうして、かわうそは喜んで、もらった塩、魚につけて食うべと思って、川にもぐったど。そしたらみんな溶けてしまつて、はあ、魚見つけるまでに無くなつてしまつたど。こんど狸は穴さ行つて、

「今夜こそ、明るくして寝んべ」

て思つて火つけたど。そしたら自分の毛さまで点いて、火傷してしまつたど。狐ばっかりええことしたど。それほど狐ざあ、悪がしこいもんだど。むかしとーびん。

「集成 7 A 狸と兎と川獺」

3 猿と蛙の寄合餅

むかしあつたけど。

蛙びつきと猿、いでやつたど。そして猿は、

「蛙あ、おれと二人で寄合田作んねが」

て、こう言うたど。したば、「ええ」て二人で作って、畔くろぬりに行つたど。畔は塗つたども、次、田うなう段になつたど。そして蛙は、

「猿殿、猿殿、今日は田うないに行くぜ」

て、寄つたど。

「いや、今日はとても頭いたくて行かんね」

て、こう言う。仕方ないから、蛙は一人で行って、その田うなうて来たずも。そして、その次の代掻きして田植になつたど。

「猿殿、猿殿、今日は田植だから、行くぜ」
て呼んだら、

「今日はとても腹痛^やめて行かんね」

て、こういうど。

「ほんでは仕方ないから、おれ一人で植えて来^くんぜ」

て、そう言うて、蛙は植えてきたど。そしてこんど、田の草取りになったど。

「猿殿、猿殿、田の草とりに行くぜ」

「いやいや、今日は疝氣^{せんき}病^やめで、とても行かんね」

「いや、ほんでは仕方ない。疝氣^ひでは冷^ひえっから、大事に寝てろ」

て、今日は田の草も一人で取ったど。そして秋になったど。

「猿殿、猿殿、稲刈りに行くぜ」

て呼んだど。

「いやいや、今日は何だか、とても気持わるくて行かんね」

ていうど。

「ほんでは、おれ、刈^くって来^くつから」

て、そして、蛙は稲も自分で刈^くって来^くたど。そして、

「それを粉にして餅搗いて食うべ」て、こう言うたど。そしたば、

「今日はおれも嵌^はまる。今日は元気だ」

て、二人してそれを粉にして餅搗いだど。そしたら、猿の言うことには、

「ただ、蛙、この餅食つては面白くないから、裏の金比羅山まで背負い上げて、この臼、まくってみないか。そして下で早く来たものは、拾って食うことにしねえが」

て、そう言うたど。蛙も仕方ないんだから、「おい」て、登ったど。

「よし、おれ背負って行くがら」

て、背負い上げたど。そして金比羅山から、ごろんごろんと、まぐったど。猿は早く下まで来て、待ち構えったど。その餅拾うべと思つて。そしたば、蛙は後からピタン、ピタンと来たば、臼に餅くついでだらええがったべに、くつつかないで、途中の柴やなんかさ、みな餅くついであら、途中にあつたど。それ蛙が拾い集めてはあ、いっぱい持つて来たど。そして来てみたば、臼が下まで来て、すとかぶさつて、蓋さつてあつたずも。そして、

「早く、蛙、開けてくる。早く、蛙、開けてくる」

ていうずも。そんなではあ、脇さ餅置いではあ、白まくして、猿ば出して呉^くつだど。そしたば、猿はさつぱり餅も食^かんねで、白の中さ入^いつていだであ。蛙はこんど、餅千切^{ちぎ}つて食^くう。猿はけなり（うらやましい）くてはあ、

「そっちの方食^くうんだ、そら下がるぞ」

なていうずも。そしてしまいに、

「おれにも、ちいと呉^くんねえか」

て、こ^う言^うずも。

「ほだども、先に拾^{ひろ}つた者、食^くうごどにしたなだもの」

て、こ^う言^うずも。

「そんなことやねで、おれにもちいと、呉^くれちや」

て、こ^う言^ううたど。そうすつど、蛙は今までのことあつて、あまり面白くないもんだから、中の方の熱いどこ取^とつて、頬^ほつぺたさピタンとぶつつけで呉^くつだど。

「ああ、あちちち…」

猿、むしり取って食べたど。

「いま、ちいと呉ろちや」

こんどまた、熱いどこ、中から別な頬つぺたさぺタンとぶつつけだど。

「ああ、あちち…」

むしりとって食べて、猿あ、それから顔赤くなつたのであつたど。

「集成 21 猿と薑の餅泥棒」

4 猿 蟹 合 戦

むかしあつたけど。

猿と蟹いでやつたずもの。そして蟹が大きなオニギリ拾つたど。そして猿はカキのタネ拾つたずも。そして途中で行き会つたごんだど。そしたら、猿はそのオニギリ欲しくなつて、

「蟹、蟹、そのオニギリ、カキのタネと取りがえねが」

て、こう言うたど。

「これ蒔いておくじど、だんだんに大きくなつて、柿という、うまいな実るもんだから、取り換えねが」

「あんまりええごで」

て、取つかえたごんだど。そして猿のほうあ、喜んでオニギリむしやむしや食べてしまつたずも。蟹はそのカキのタネ、自分の家の前さ持つて行つて、土の中さ埋^いけで、そして柄杓で水掛けて、

早く芽を出せ　カキのタネ

出さねどハサミで　ハサミ切る

て、こう言うて水呉つたど。そしたら芽ひよこんと出だずも。

早く木になれ

実^なんねどハサミで　ハサミ切る

て、こう言うて、また水呉つて、こんどずんずんその木大きくなつて、柿^な実る

ようになった。そしてこんど、秋になってはあ、柿、色づき出した。そして、猿はまた山の上からその柿眺めで、

「色ついだ。降つて行つて、もいで食つて呉んなね」

そう思つてはあ、降りて来たもんだ。

「蟹、蟹。あの、いつか取つかえた柿だが、実^なつてだな」

「ほだ、落ちて来たな食うかどて、毎日眺めてた」

て、こつ言つた。

「おれ、もいで呉れつから」

そして登つて行つた。そしてはあ、おさえて見て、やつこいようなもいはあ、自分ばり食うずもの。

「自分ばり食つてねで、おれちやも、もいでよこして呉^くろ」
て、こつ言つた。

そしたら、あまり赤くもなんねえようなもいで、鼻なのこぐつて投げてよこすずも。

「こんな固いな食んねえから、やっこいようなどこ呉ろ」

ていうずも。また別な舐めて、尻の頬などこぐつて投げてよこすずも。

「そんな意地悪しねえで、うまいどこ一つ振いで呉ろ」

て、そういうど。こんど、

「よしきた」

て、もいで、その蟹めがけて投げてよこすずも。柿、固いな投げらったもんだから、甲羅つぶれてしまったずも。そしたら親は死んでしまったど。それ、子蟹わきで見えて、泣いっただど。猿は持つて、たくさんうまいどこ食つて逃げて行つたずも。そしてオイオイ泣いっただどさ、臼、ゴロンゴロンと転んできたど。

「はて、なして泣いっただど」

て聞いたど。そしたば、

「おら家のおつか、猿に固い柿もいで、ぶつつけらつて、殺さつてしまったも」

て、こう言うて泣くど。

「よしよし、おれ仇とつてくれっから泣くなよ」

て、こう言うたど。そしてるうちに、蜂ブーンと飛んで来たど。

「蟹、蟹。なして泣ிட்டのであつた」

て聞いたど。

「おらえのおつか、猿に柿ぶつつけらつて、死んだもの」

こう言うど。

「おれも、ほんでは仇とつてやつから泣くなよ」

そしていたどこさ、こんど栗ころんできたど。そして栗もその話きいて、

「んでは、おれも仇とつてくれっから」

て、三人で相談してはあ、家の中さ入つたど。そして猿来る頃だと思つて、栗はこんど炉の中さ隠つてあつたど。それから寒い日であつたど。蜂は味噌桶さ隠つてあつたど。蟹は、

「お前は流しにいろ」

て、臼教えたど。そして臼は廊下の上さ隠れたど。そしてるうち、猿来たずもの。キチヨ、キチヨてよはあ。そして、

「寒い、火でも、ほげで、あたんなね」

ぐいぐいとほげっど、栗、ばーんとはじげだもの。

「熱ち、あち、あち…」

「まず、水でも掛けんなね」

流しに行くど、こんど蟹にはさまっただど。「蟹、はさめよ」て教えっだもんだがら。

「いや、痛い、痛い。味噌でもつけて」

こんど味噌桶さ行くど、蜂に刺さっただど。

「いや、こんな恐っかない家さいられるもんでない」

て、逃げると、臼、屋根から、ゴロンゴロン、うんと落ちて、こんど猿さ、とつちめでしまっただど。そして「早く来い」て、蟹さん呼ばって、そして猿の首、ハサミではあ、こう、チョキチョキと切って、仇とらせたけど。むかしとーびん。

「集成 27 A 蟹の仇討」

5 かちかち山

むかしあつたけど。

じさま、火野の豆蔕かのきに行つてで、

「一粒、千粒になれ」

そこさ、むじな出てきて、石さ腰かけて、「一粒、一粒できずがれ」て、こういうたど。そうすつど、じさま、鍬で、「この畜生」と叩く氣になつたど。そうすつど逃げられた。翌日、モッチ（鳥餅）もつて行つて、石さ塗つておいた。そしてその石さ腰掛けたどこば叩いだんだど。むじなは死んだふりした。じさ、家さ持つて行つて、

「ばさ、晩げ、むじな汁しておけよ」
て、また山さ行つた。

ばんさ、小屋で米コ搗きしてたら、むじなは、
「ばさ、ばさ。おれ搗いて呉れんべ」

て、こう言うた。

「いや、また、じんつあ帰るころ、おれば縛って下げるんだ」

て、こう言うた。そうすつど、ばさまが降ろして米搗いてもらった。

「ばさ、ばさ、搗けたが何だか見ろ」

ていうた。ほうして見るどこ、頭搗かっで、ばさまの着物きて、ばさまに化けてだど。むじなはばさまの肉剥いで、むじな汁こさえたど。じさま帰ってきて、

「なんだか、このむじな、しないな」

ていうたど。そうすつど、

しないもしないも 道理がさ

むじな汁食て ばば汁食った

て、おどつて逃げあがった。

じさまが不思議に思つて縁の下見たば、ばさまの死骸があつた。じさま悲しんでいたどこさ兎きて

「なして泣ிட்ட」

て聞いて、じさま、

「こういうわけで、ばさま殺さった」

ていう。

「仇とつてくれつから、泣くなよ」て、兎あ言うたど。兎がむじなのどこさ行つて、「柴刈りに行かねか」て、さそい出したど。そして柴とつたな、むじなさは、燃えそうな背負わせだ。途中まで来ると、兎が、

「ああ、病めて、とても歩かんね」

ていうたど。むじなは、

「おれの柴の上さ、あがれ」

て、柴の上さあげて呉つたど。カチンと火打ち石で火をつけたど。

「何しった。火打ちのような音するな」

「あれは、カチカチ山のカチカチ鳥よ」

て、兎が答えた。そのうちに、ぼんぼんと燃えると、ぴよんとはね降りて逃げて行つた。そして家さもどると、南蛮と味噌とねり合せてこさえつたど。そして

むじな家の前で、

「火傷の薬いらんか」

といった。

「ああ、切ない。ああ、切ない。早くつけて呉ろ」

ていうたど。そうすつど、背中じゅう味噌、でのごと塗って呉つだど。

「いたい、いたい」て苦しむどき、「ばばの仇討ちだ」て逃げだど。そして逃げる
とき、

「いやいや、兎、兎、お前、この間はひどいことしたな、おれの背中さ火つけて
逃げだでないか」

「それは、カチカチ山のカチカチ兎だべ。おれは薬売りの兎だから知らね」

て、杉やぶさ行つた。そして今度は、舟を彫つてだて。そさ、ようやく背中な
おつて、むじな来たど。

「兎どの、兎どの。お前はひどいことする。おれの火傷の背中さ南蛮味噌塗らつ
だ」

「それは薬売りの兎で、おれは杉やらの兎だから、知らね」

ていうど、むじなは、

「それ、何するもんだ」

「川さ持つて行つてのつど、面白いもんだ」

「おれに一つ造つてくんねえか」

「あんまりええどこでない」

ほして、自分のは杉舟、むじなには土舟造つて呉つじや。そして二人で磯まで持つて行つて川さ浮かべだど。そして、

「杉舟こんと行け」て叩くど、兎の舟はすうと行つた。むじなは、

「土舟、こんと行け」て叩くど、ざくつと割れて、川さ落ちて死んだけど。むかしとーびん。

「集成 32 B 勝々山」

6 古屋の漏る

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいであつたど。貧乏な家で、屋根もろくに葺かんねがつたど。そしてある夜、二人で炉端であたつていたど。んだども、ええ馬コ生まれてあつたど。そして飼つて大事に育てたど。それ、こんど馬喰は、

「あそこのトネツコ、行つて売れて言うども売んねがら、盗んで呉れんべ」
て、こう思つて、待ちかまえていたど。そしてこんど狼は、

「あれ、何とかして、このじんつあとばんちや、食つて呉つだいもんだ」

て、そう思つて軒場さ来ていたど。そしたら、じんつあとばんちやと話には、

「なんて、世の中に恐つかないと言うたて、古屋の漏るど、米櫃の空ほど恐つかないものないな」

て、二人で、こう言うたど。

「はて、狼も恐つかなくない、古屋の漏るなんていうもの、米櫃の空なんていう

ものは、どんな恐つかないもんだべ」

て思つて、そう思つていたど。

「こんな恐つかないどこには居らんね」

て思つて飛び出したど。そうすつと馬喰、トネツコ飛び出したと思つて、狼さ縄かけて結^ゆつないでしまったど。とうとう狼は馬喰にとらつでしまったど。むかしとーびん。

「集成 33 B 古屋の漏り」

7 ねずみといたちの寄合田

むかしあつたけど。

むかし、越前の川原ていうどこさ、ねずみ、栗蒔いだど。して、よく実ったもんだど。ねずみ、大抵刈るころになったべと思つて行つてみたど。ほうしたらば一本もないずもの。誰か刈つてしまつて。

「はてはて、これ、いたましい。誰刈って行つたもんだべ、他人^{ひと}の粟^もど、そう思つて来たば、牛いたど。

「牛どの、牛どの、越前の川原の粟知しやねえが、誰刈つたが」
て聞いたど。

「おれは、知しやねえモー」

なて、行つてしまつたど。こつちさ来たば、犬に行きあつたど。

「犬どの、犬どの、越前の川原の粟刈つたな、お前^みだか」

「そんなもの知しやね、ワンワン」

なて行ぐぜす、ほして来たば、鳥に行きあつたど。

「鳥どの、鳥どの、越前の川原の粟刈つたな、お前^みだか」

「粟、知しやない。があがあ」

なて飛んで行つたど。

ほうしてはあ、誰刈つたもんだかと思つたども、もしやしたら、いたちだかなあ
と思つて、いたちの家さ行つたど。

「いたちどの、いたちどの、越前の川原さ粟まいたな、刈ったな、お前^みだが」
ていうたど。

「いやいや、おらは刈んね」

そんな話したどさ、いたち子、ちよろちよと出はつてきたど。

「おつか、おつか、ゆんべ搗いた栗餅食^くだい」

ていうたもの。そうしたら栗盗^たんだことわかったけど。それがらはあ、ねずみ
といたちは大仲違^{たが}えになったけど。むかしとーびん。

「集成 34 鼠と鼯の寄合田」

8 オッテンタカ鳥

むかしあったけど。兄と弟の兄弟いであつたど。弟は働き者ではあ、一生懸命
で働いて山さ行ったときなど、山諸掘^くってきては、兄んにやええどこ食^くせて、自

分がナシクビの方ばり食ってであつたど。そしてまたいつものより大きな掘つてきたども、兄いながつたずも。そんな時、んだども、兄んにやのどこさ大きな残しておくべやと思つて、ええどこ残して、自分はナシクビの方食つていたど。そして兄どつからか帰つてきて、「残しつたぜ」というたば、それ食つてはあ、あまりうまいもんだから、

「おれさ、こんなええどこ残して食せるぐらいだら、自分がどんなうまいどこ食つたもんだ」

て思つて、殺したずもの。そして腹さいてみたば、ナシクビの悪どこばっかり食つてであつたど。そうしたば、こんどはあ、神さまに鳥にさつでしまつたど。そして時鳥という鳥にさつではあ、八千八声鳴かねば餌もらわんねことになつたど。そして、

弟恋しや オツテンタカ鳥

弟恋しや オツテンタカ鳥

て、口休める暇もないずもの。「オツテンタカ鳥、オツテンタカ鳥」て鳴かねね

くて。そして八千八声鳴いたとき、木の枝さ蛙ひつからびたようなもの一つぐらい引つかかつていつことある。おらだ山さ行ぐど、それが時鳥の餌だなて、教えらったもんだ。むかしとーびん。

「集成 46 時鳥と兄弟」

9 テデッポッポ

テデッポッポていうのは、ソッポな息子、むかし、いでやっただ。おっかさんが水汲んで来て呉るて言うずど、土など持って来たりするソッポな息子いでやったずも。そのおっかさん、病氣になっただ。そうすっど、

「とても、おれ、死んだら、こんなソッポな者、なじよになるもんだか、困ったごんなもんだ」

て、心配しながら、目落しそうになっただ。そして、
「にさ、まず、おれ死んだら、川端さ埋めて呉^くろよ」

て、こう言うたど。ソッポだから、山の方さ埋めんべちやえと、こう思つて。そしたば、それ、なんぼソッポな息子でも、親に死なつてみたば、改心したずなんだか、こんど親の言うこと初めて聞いたごんだずも。そしたば川端さ持つて行つて埋めたど。そしたらある時、水出れば、そこ欠けて流つて行つたずも。そしたばこんどは雨降りさえすつじど、思い出して、

テデッポッポ　ダダ（母）流つた

テデッポッポ　ダダ流つた

て泣くようになったけど。むかしとーびん。

「集成　48　鳶不孝」

10　蛇まじない

蛇、むかし、ゴウガの山というどこさ、昼眠したごんだど。そうしたら、蛇の敵はナメクジだて。ナメクジにぐるっと取りかこまっでいたずもの、目覚めたば。

「いや、これは困ったごんだ」

て思っているうちに、ワラビ、によきによきと出てきたことだけど。それ、ワラビって育ち早いもんだものなあ。そのワラビ伝つてはあ、蛇、ようやく逃げてあつたど。んだから、蛇恐つかないと思つたら、「蛇よ蛇、ゴウカの山に昼眠して、ワラビの恩を忘れたか」て、そう三度詠んで歩くもんだ、そう教えらっただけな。むかしとーびん。

「集成 81 蕨の恩」

11 蛇 聾

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいで、三人娘もつていでやつたど。そしてこの人は裏田に千刈、前田に千刈、田んぼ持つてだど。そしてその年はなんと旱魃で裏田千刈に水掛ければ前田千刈干^ひつてしまう。前田千刈に水掛ければ裏田千刈干^ひつてしまう。

そしてその水の出るとこの沼さ行ってみたら、沼の水も少なくなつてだど。

「はてはて、裏田千刈、前田千刈さ水かけてくれる人あれば、娘三人持つてだが、どれか一人呉れるが」

て、一人言語ことつたど。そしたら、きれいな男が、その沼がボーッと波立つと出てきた。そして、

「じんつあ、じんつあ、今の話本当だか。おれ掛けてくれっから、おれに呉れるか」

て、こう言うたど。そしてこんど、家さ来たども、そんな一度に掛けられるもんでないと、簡単に約束してきたど。そしたらその晩、大雨降つて、前田も千刈、裏田も千刈、みんなダンブリ水掛けてしまったど。

次の朝げ、じんつあ困つて寝てて起きねど。姉娘行つて、

「あの、じんつあ、じんつあ、飯出たから起きろ」

ていうたば、

「いや、実は飯も食くたくないようだ。昨日、おれきんあ沼のどこさ行つてこういうこ

と言ったば、これこれの男出てきて、約束したなな、それがその約束どおり雨降つて、裏田も前田も、ダンブリしてしまった。そんで嫁に、お前だどれか一人呉んなね。行つて呉れつか」

て、こ言うたど。

「そんな、わけの分んね者さ、嫁ゆめかれるもんでない。なんぼじんつあでも…
て、こんど荒々しく出で行つたど。二番目の娘来て、

「じんつあ、じんつあ。飯まだから起きろ」

そしてまた、そのとおりに言つたども、その娘も、

「そんな馬鹿などこさ行かんね」

そう言うて出で行つたど。三人目の娘きて、また言うたど。そしてその通りに
じんつあ言うたば、

「ええどこでない、じんつあ。ほだらおれの頼みも聞いて呉ろ。おれにひようたん千と、針千本買って呉れば、嫁に行くから、買って呉ろ」

て、そういうたど。そうして、じんつあ、

「そんなことはあ、あんまりええぜえ」

て、さっそく小国の町さ行つて買つて来たど。何すつと思つたら、そのひょうたんさ一本一本に娘はみな針入つたど。そうして、

「これを、おれの嫁入りの葛簞つづらに入れて下さい」

て、そして入れてもらつて待ちていたど。約束の日、そうしたば、ええ男あ来たど。迎えにな。そして、

「おれと一緒に歩あえべよ」

て、そう言わつて行つたど。そしてついて行つたら沼であつたど。

「ここが、おれの家だから入れ」

て言わつたど。

「入るは、あまりええども、これ身上だから、葛簞、これも一緒に入つて行くから、身上沈めてもらうまで入らんね」

て、そしてその葛簞入れたら、蓋とれて、そのひょうたんみな浮きたど。そうすつど、その男、一生懸命でそつち沈め、あつち沈めすつども、ひよこん出はり、

ひよこんと出はりすつずもの。そうして夢中になつてゐるうちに、自分の化けたことも忘つてしまつて、大きな大蛇になつてしまつたど。そうしてバダン、バダンと沈めようとしてゐるうちに針出はつて、全身さ刺さつてしまつたど。そうしてはあ、苦しんで苦しんで死んでしまつたど。娘は、

「ああ、これでよかつた。そうしたら田も干されることないし……」

て思つて、家さ歸つてきて、じさまにその話したど。「お前は姉妹中で一番親孝行だから、この身上はみなお前に呉れつぞ」て、そして後とり娘にしてあつたけど。むかしとーびん。

「集成 101 B 蛇簪入」

12 猿 簪 入

むかしあつたけど。

じんつあとはんちやいだつけど。じんつあは夏の暑い日に、火野さ豆の草取り

に行つたど。うーんと草生えで、じんつあ取り立てらんねほど生えつたど。

「いやあ、暑い暑い、この豆の草、ほに、取ってくれる人あんだら、娘三人持つた、どれが一人呉れつどもな」

て、こう言うたど。したば、ガサガサ、ガサガサ出てきたど。山のおんつあ。

「じさ、じさ、何語つた」

「何も語んね」

「語んねなていうど、こちよばすぞ」

「いや、今、豆の草とってくれる人あつど、娘三人持つた。誰か一人呉れるて、そう言うた」

ていうど。

「おれ、取ってくれつから、おれに呉ろ」

猿なもんだから、ひゆうひゆうひゆうと取つて、一時に終いっときしてしまつたど。おや

「じさ、じさ、もらいに行んから、呉ろよ」

じさも氣重いども、家さ来て、まず飯食つて寝たど。次の朝げになつて、

「何としたらええがんべ、まず」

と思つてはあ、起きらんねずも。したら姉娘、

「じんつあ、じんつあ、飯出たから、あがれ」

て、起こしに行つたずも。

「御飯食うもええども、にさ、まず、おれ言うこと聞いて呉んねが」

「なじよなごつだが言うてみろ」

したら、

「実は、昨日、豆の草取りきんなに行つて、あまり暑かつたもんだから、この草取つて

くれる人に、娘一人くれるて約束した。一人言語つたらば、猿出はつてきて、草取つてくつで、そさ呉んねねごどになったから、行つて呉んねが」

「何語つていんべ、まず。猿のおかたになてなられつか」

がちやつと戸閉たてて行つたど。

「はて、困つたもんだなあ」

と思つていたば、二番目の娘行つて、また起すど。ほうしてじんつあ、またそ

ういう風に頼んだど。

「何、もんぼれ語っている。このじさま」

て、枕蹴つとばして行つてしまつたど。そして三番目んな、お花と名付いであつたど。それ起しに行つて、じさはあ、また語つたど。

「猿の嫁になつてくんねえか」

て。ほしたら、

「ええどこでねえから、起きろ」

ていうずも。ほして起きてまず飯食まきつたど。ほうしたば、こんど猿あ新しい手拭いなど、頬かぶりして、もらいに來たど。して、もらわで行つたずもの。

そして次の年の節句になつたど。

「節句札に行きたい」

て、餅搗いたど。そして、「どの重箱、ええ」なて言うずもの。

「いやいや、おら家のじんえつあは重箱くさいて、重箱の餅は食ねし」
なていうた。

「んでは、朴の葉だが」

「朴の葉くさいて食ねし」なて。

「ほんでは、なじよにしたらええか、臼まま背負って行んか」
ていうずも。

「そしてもらえば、一番ええなあ」

て。猿、臼背負って来たど。川端通りかかったらなんぼかきれいな桜咲いっただど。

「いや、きれいな桜だごと。おらえのじんつあ好きなどどもなあ」
て、こ言うたど。

「ほんじゃ、おれ、折おしよっから」

て、どっこいしよなて、臼降ろす氣になつたど。

「いやいや、土くさいって、じんつあ食ねがら、降ろさねでくろ」
ていうた。

「んでは、背負って登っか」

背負つて登つて行つて、「この枝ええか」て、手伸ばしたら、

「もうちつと上^{うえ}んな、格好ええようだな」

「んでは、この枝か」

「いや、その上んな、ええようだな」

て、こう言うたど。そしてそさ手伸ばすどき、裏（先）の方になったもんだから、ポキンと折れで、臼背負つたまんま、川さガボンと落ちだど。ほうして流れ、

猿沢にながるる命おしくはなけれども

あとにのこりし お花 こいしや

て、そういつて流つて行つたけど。そしてお花、家さきて、じんつあに教えたば、

「ほんでは、ここの家さ、親孝行だから、お前にゆずるぜえ」
て、家ゆずってもらつたけど。むかしとーびん。

13 山鳥女房

むかしあつたけど。

ある百姓、山道、夕方通りかかったば、一羽の山鳥きじ、罌わなにかかつて苦しんでいたどこさ通りかかつて、それ助けて家さ帰ったけど。そしたば次の日、ええ女尋ねてきて、

「おれ行くどこ持たねから、かがにしていゝ呉んねが」

ていうて、その家にいるようになったけど。そして、

「おれ、何も仕事もないから、機でも織るから、おれ、ほだども、機織つてらうち、機織部屋さ来ないでくんねえか」

そう頼んで、そして織つて出来あがつた機持つて来て、そしてこんど、この親父に売らせて、儲けらせてあつたど。そして、

「また織るから……」

ていうども、

「こんな、きれいな、どんな真似して織るもんだか」

て思つて、そつと窓の切れから、親父が見だつて。そしたば羽根もろくになくなつた山鳥、一生懸命で機織りしてであつたど。そしたば、山鳥が見らつたこと分つて、んだからその機、一反織り上げつどはあ、

「あれが、この前助けらつた山鳥であつた。恩返しに來たんで、あつたども、見らつでは、いらんねがら、これで歸らせてもらう」

て、歸つて行つたけど。んだから、鳥でも恩返しということ知つてるもんだど。
むかしとーびん。

「集成 115 鶴女房」

14 蛙の法事

むかしあつたけど。

一人ものの男がいたどこさ、あるとき、見かけのええ女、

「おれば、おかたにしてくんねえか」

なて来てあつたど。

「あんまりええぜ」

なて、そしてはあ、一緒になつたど。したらある日、

「おれ、親の法事だから、行つて来っから」

て、こう言うずも。

「お法事だら、家さ何か持つて行かねごで」

ていうたど。

「いや、何もいらね」

て、そう言うて行くずも。

「何だ、法事にいらねなて、おかしいもんだ」

と思つて、後追かけて行つて見たど。そしたらば、こんど何だか山の方さ行くずも。それからこんど、ずっと気付かねように追かけて行つたば、沼コあんなさ、チャポンと飛び込んでしまつたど。そうして高いところから見つたば、こんどあつ

ちからも来、こっちからも集まりして、蛙いっぱい集まってはあ、真中に大きな蛙一人いで、ヂコヂコ、ヂコヂコと始まったごんだずもの。

「しゃ、何だべ、おれあ、蛙はおかたにしたんであったべが。一ついたずらして呉れんべ」

と思つて、石拾つて真中の大きな蛙の頭めがけて投げてやつたずもの。そうすつど、あんばいよくぶつつかつたずもの。頭さ。そうすつど一時にみな鳴き止んでしまつたど。いや、親父、大氣もみして家^{おお}さ来て、知しやねふりしつたごつたど。そしたら晩方、おかたはあ、何だか面色も本当でなく帰つて来たど。そして今度は、

「御法事はなじよであつた」

て聞いたど。「今帰つてきた」て来たもんだから、

「いやいや、今日の御法事は大台なしであつた。和尚さまの頭さ、石どつかから飛んできて、ぶつつかつたもんだから、御法事は台なしであつた」

「あの蛙、和尚さまか」

と、こう言うてしまったずも。そしたばこんど、

「いやいや、そういう風に、おれ、正体見破らつではいらんね。暇呉つておぐや
い」

てはあ、出て行つてしまつたど。むかしとーびん。

「集成

111

蛙女房」

15 天人女房

むかしあつたけど。

あるとき、若い衆ら稼ぎに行つて浜辺通りかかったら、きれいな着物、松の木の枝さかかつてあつたずもの。それからこんど二枚も三枚もあつども。それから一番きれいなような、と思つてふところさねじ込んで知しやねふりして、藪の中さ隠つて見っだど。そしたば水浴びしつた女衆、上がつて来たずもの。三人だか四人も上がつて来てな、一人の女は、その着物ないもんだから、ほら、着るこ

とでないずも、そして探していっども、ないもんだし、

「早く行かねば行かんねくなるから、お前探してこい、おらだ行ってるから」

て、着物ある人はそれ着てはあ、みな天さ舞い上がって行ってしまった。ほしてはあ、着物のないな、うずくまって泣き出したずもの。そうすつど、藪からその男出て、

「なして泣く」

なて、知しやねふりしていたど。そしたらこういうわけで着物なくて、おれ、家さ帰らんねて、そういうたど。

「ほだら、まず、おら家さ歩えべ、何か着るものあんべから」

なて、連つでったごんだど。そしてこんどはあ、羽衣見つけらんねように、戸棚の隅^{すま}この方さ突込んで、自分の衣裳など出して、着せておいだど。そして帰らんねて言うし、

「仕方ないから、ほだら、まずおれ、おかたになっていねが」

て、そういうて騙して、おかたにして置いたど。そしてそのうちに、男の子ど

も生れだずもの。そしてその子ども、いたずらするようになってから、そこら引つかき廻したば、羽衣見つけて引張り出したごだずも。

「おかちや、おかちや、こんなきれいなものあるわ」

て、こう言うど。

「いやいや、これはおれの大事なもんだ。どこにあったや」

戸棚の隅すまこの方にあつたぐらいなこと教えたべちや。

「ほんでは、おれ、これあれば天さ帰られる。おれは天の人間ななであつた」
て。

「お前は、おどつつあと二人で、ここの家で暮せよ。おれは天さ行くから」
て、親父、また働きに行つたその間に、子どもによく言い聞かせて、

「もしや、おれにまた会いたくなつたら、この夕顔の種子呉つて行くがら、それ蒔いて馬の沓百足拾つて、肥料こやしにしるよ、そうしつど天まで登つて来られつから」

そう言うて教えて行つたど。むかしはカナグツなんて出ないうち、藁で作つた沓はかせておいたものだど、馬に。それ百足肥料しろて教えて行つたど。そして

こんどはあ、野郎こ、行がっでしまったもんだから、泣いっただわけだど。夕方、親父どの帰ってきて、

「なして泣いっだ」

ていうた。

「おら、かあちゃん、ほだたて、おれ、ここほげだら出はってきた衣裳着て、天さ登ってってしまった。ほして、おれに会いだくなったら、この夕顔の種子蒔いて、馬の沓百足肥料にすれば、会われっからな、来られっからな」

て、そういうて教えて行つたつて。こ言うど。それからこんど、親父もはあ、こんど「そうすつこで」て、夕顔の種子蒔いて、見つけど馬の沓一生懸命で拾つて来たもんだど。九十九足になったど。ほだども、あと一足ないつたて行かれんべ、ほら、うぶされ」

て、野郎こば背負つて夕顔のぼつて行つたど。そうして登って行つたところが、いまちいとして、天さ届かねこんだずも、そして九十九足で届かねで、

「んでは、ここから、しゃなつてみるか。おっか、やーい」

て、野郎こは、しゃなつたわけだ。そしたば来たど。ほだども、

「約束どおり、もう一足たんねくて、天さ届かねなだから、お前だは人間の世界で暮さねことになつてた定めだべから、ここから戻つて呉^くろ」

て、顔見ただけではあ、

「今日は戻つてもらわねね、約束を破らんねもんだぞ」

て教えらつではあ、親父もはあ、それ聞かせらつて、あきらめて、そこから子どもつれて戻つてあつたど。天と地の人間はやつぱり別に暮さんなねがつたんだけど。むかしとーびん。

「集成 118 天人女房」

16 一寸法師

むかしあつたけど。

おじいさんとおばあさんいたけど。子ども持たなくて、まず、鎮守さまさ願か

けて、

「子ども一人、ちっちゃな子ども一人欲しいもんだ」

て、こう願かけしたずもの。そして生れたば、ほんにちっちゃいな生れてしまつたずも。

「仕方ないから、ばあ、一寸法師だ、こんなものは、欲しい欲しい」

てばり言つてだど。そしたればやつぱり十五、六歳にもなつても、ちっちゃいもんでだずも。

「ほだども、じんつあ、ばんつあ、おれ京の方さ行つてみたいと思う。そしたばおれみたいな者でも、何とかなる知んねえから」

て、そしてこんど。

「お腕の舟に、箸の櫂で十分だ」

て、そして出かけたごんだど。京さ。そして京都さついて、そして公家さまの玄関さ行つたど。そういうどこさ勤めたら何か勉強もされんべと思つて。そして公家さまの方さ行くべと思つたら、雨降つて来たごんだずも。そしてこんど唐傘

さして立つてゐる人いた。その足駄の下さ入っていたごんだど。そしてこんど「もしもし」で、こう言うたど。

「何だか声するようだ」

と思つて、その人見つども、人いねず。そしたらこんど、

「誰だ、おれを呼ぶるな」

て聞いたど。

「足駄の下からだ」

こう言うずも。それから、踏んづけねようにそおつと足ずらしてみたらば、ちつちやな子ども、なるほど足駄の下にいてやつたど。

「おやおや、本当だ。お前はどこから来た」
ていうたば、

「この川上から来たもんだ」て。

「んだども、体小さいども、京に行ったら何か勉強でるかと思つて来たども、お公家さまの屋敷さでも勤めて勉強したいと思うども、お公家の屋敷教えてもらい

たい」

て、こういうたど。そしたら、

「おれも公家だ」て。

「ほだら、おら家の屋敷さ勤めるか」

て、こういうたど。

「勤めるといふより、お前、こんな小さいもんで、姫の遊び相手だごで」

て、こういうたど。そして連れて帰ったど。そしてお姫さまに、何か勉強教えてやれて、お姫さまの遊び相手になっていたど。そしていたら、

「今日は、まず、桜見につれて行くから……」

て、そして京の清水さつれて行くのに、タモトさ入れて行つたど。そして見に行つたところが、人も大勢いるな、こんど鬼が現われたごんだずもの。そしてこんど、お姫さまあんまり美しいもんだから、さうう氣になつたど。そうすつど、法師がタモトから飛び出してその鬼さ針の刀刺してであつたど。それで鬼の目さジョキジョキと突いたずもの。登って行つて。鬼もこうはらうべと思うども、小

さいもんだから、どこにいたも分んねえずも。鼻の孔を突ついたり、目を突ついたりするもんだから、お姫さまは放す。大事な打出の小槌まではあ、落して逃げて行つてしまつたど、鬼。そしてお姫さま助かつて、その打出の小槌拾つて法師、

「これ、打出の小槌つて、何でも思うことかなうそうだから、お前を大きな人になれつか、一つ、振つてみるか」

て、そうしてこんど振つた。

「一寸法師、大きくなれ」て。ズンと大きくなつたずもの。

「もう少し大きくなれ」

ズンと大きくなつたど。そして丁度ええ若衆になつたずうもんだ。そしてこんどはあ、お公家さまのお屋敷さ歸つたど。そしていろいろな勉強教えてもらつて利巧者だから、そのお姫さまのお簪さんになつてやつたけど。むかしとーびん。

17 瓜姫子と天邪鬼

むかしあつたけど。

じんつあとばんちゃど、いでやったど。ばんちゃ川さ洗濯に行つたば、川上から大きな瓜、ドンブリコ、ドンブリコと流れて来たど。それから、

「こんなうまそうなな、拾つてじんつあと食うべ」

て思つて、そして家さ持つてきて、割る氣になつたば、瓜の中からかわいい女の子生れてきたど。そして、

「瓜から生れたから、瓜姫子と名付けっぜえ、じんつあ」

て。そして瓜姫子と名付けて、めんごく育てて来たど。そして大きくなつてから、機織りするようになったずも。そしてトントンカラリン、トンカラリンと機織れるようになって、じんつあとばんちゃ、

「おらだ町さ行つて、お前の好きなもの買つて来てくれっから、おらだ留守のうちに、天邪鬼きたたて、決して戸あけんなよ」

て、そう言うて教えて行つたど。そうして瓜姫子はトントンカラリン、トンカラリンと織つてだど、そしたば、天邪鬼来たずも。そして、

「瓜姫子、瓜姫子、ええ空だから遊びに行かねか」

て、こういうたど。

「いいや、今日は機織れつていわつだから、出はんね」

て、こう言うたど。

「そんなこと言わねで、出てみる、この戸、ちいと開けて呉んねえか」

て、こういうど。

「じんつあとばんちやが開けんなて言わつだから、開けらんね」

「指の先だけでもええがら、出して呉んねえか」

て、こう言うずもの。ほんでやさしい瓜姫子なもんだから、少し開けて呉つたど。そうすつど、ガラツと開けて入つてきてしまったど。そしてこんど、

「遊びにあえべ、あえべ」

て、聞かねずも、瓜姫子ば引張つてはあ。そうして裏の桃の木の下のキンニヨ

（木を積んでおく所）さつれて行つたど、遊びに。そうしてその木の上さあがつて遊んでゐるうちに、

「瓜姫子、おれ、シラミとつてくれつから」

「頭さ、シラミなどいねぜ」

ても、言うげんども、聞かねで髪ほどいてしまつたずも。そうしてその桃の木の枝さ、髪、ギイギイと巻いてしまつてはあ、瓜姫子のどこ下げてしまつたずも。そしてはあ、殺してしまつたずも。そうして瓜姫子の着物みな剥がして自分が着てこんどは機織りしてたど。ほだども、あんばいよく織れねがつたべども、織つてだど。じんつあとばんちや帰つて来たど。

「瓜姫子、天邪鬼こねがつたか」

て、聞いたど。

「来ねがつた」

「ほんだら、トコロも掘つて来たから、トコロゆでて呉れつから、これから食うか」
そういうたど。そしてゆでて呉つたら、皮も剥かねで食うずもの。

「瓜姫子、皮剥いたり、毛むしったりして食うもんだぜ」

「毛は毛のくすり、皮は皮のくすり」

て、みな食つてしまふ。そうしておかしいなとは思つてだども、こんど次の日になつたば、向うの町から、

「瓜姫子はええ娘だちゆうから、嫁に呉つでけろ」

て来たど。じんつあとばんちやは呉つでやつたど。そしてずつと行くど萱野さ行つたど。そうすつど小さい鳥とんできて、簞さくつついたど。

瓜姫子ののる簞に

天邪鬼は のりーた のりーた

て、さえずる。天邪鬼は「シイシイ」と追うども、「瓜姫子ののる簞に、天邪鬼はのりーた、のりーた」ていうど。そうすつど、供の者も気付いてはあ、

「この畜生、化けだか」

て、叩いて教えたど。そしてそこに萱林あつたもんだから、そこ、天邪鬼の血で、それ染つて、今でも萱の根は赤いと。むかしとーびん。

18 子育て幽霊

むかしあったけど。

あるところに、若くて子ども生んだばかりで死んだどつす。お嫁さんがな。そんなども、こんどその旦那さんが子ども抱えで、もらい乳して歩くようなあんばいであつたど。

死んでもその母親は子どものこと心配して、そして夜になつど、お墓から出てきて、（この辺で死んだとき、六文お金もらつて行くのな）その一文銭もらつて飴屋さ行くずだもの、毎晩げ。そして、

「飴、一文宛売ってくろ」

て、そう言つて、一文宛の飴買つてきて、そして子どもの口さ、その飴放り込

んで帰り帰りました。そしてはあ、六晩も続けたども、あと金がなくて買うよできながつたど。それ、こんど父親は、

「はあて、六晩も大人しかつたに、まず…」

て思つて、

「なんちゆうごんだべ、こんなことは」

て、そう思つていたど。そしたばその飴屋に、

「こういう女が、おら家さ飴買いに来てあつた」

て、聞かせてらつて、ほんで、

「死んでも、この子ば心配して、出てきたなあつた」

て、よくよく大事に育てらんねて、親父あ本気になつて子ども育ててあつた

ど。むかしとーびん。

「集成
147 A 子育て幽霊」

19 孝行息子

むかしあつたど。

これ持つて行つて埋めてくんねえかと頼まつたど。嫌んだと言わんね性分なもので、それ背負つてきたど。

「とても、こんな夜埋めらんねがら、明日に埋めんべ」

て思つて、自分の庭さ置いて、次の朝げになつてみたは、みなお金になつてだて。むかしとーびん。

「集成 163 C 系 おぼしよ」

20 二十四孝

むかしあつたけど。

一人の親孝行な息子、毎日、仕事に行つて帰りには酒買つて来^き来^きいたど。

父親、酒好きなごんだから。

そしてある日、働き少なくてはい、酒買って来らんねがった。そしてヒサゴ（ふくべん）持って行くなだども、

「困ったこれ、酒買えば米買わんねし、今日は稼ぎ少なくて」

て思つて来たらば、滝どんどん、どんどんと流れでる滝の傍まで来て考えたごんだ。

「この水、酒だったら、どんなに仕合せなんだかなあ。まず仕方ない、水でも一回飲んでみつか」

と思つて飲んだ。そしたば酒の味すつずもの。

「いや、これは神さまのお授けだ」

と思つて、そのフクベンさ水汲んできた。そして、

「おどつつあ、今帰ったぜ」

て、そしてそれ飲ませてみたらば、やっぱり酒であつた。

「いや、今までにない、うまい酒、にさ、買ってきて呉つたなあ」

て、喜んで飲んだずも。そしてはあ、それ憶えて毎日のはあ、

「これ、あしたも汲んでも酒なんだかなあ」

と、次の日も行つて汲んでみたば、やつぱり酒だずも。そしてはあ、毎日上がりにその酒買うので、滝の水汲んでくるもんだから、暮しも楽になつて、父親もええ布団も着られるようになってはあ、仕合せに父親ばも安樂させて死なせてやつたけど。むかしとーびん。

「集成 154 酒泉」

21 兄弟話

むかしあつたけど。

あるどこに大勢の子ども持ったじんつあとばんちやいであつたど。子ども大勢のために、働いても働いても身上はよくなんねがつたど。そしてはあ、とうとうはあ、子ども大きくなつたども、何にも与えらんねで死ぬようになつたずも。そ

ん時、父親、子ども皆集めて、

「お前だには、何も残して呉れつことでないようなもんであったども、おれあ、金瓶、裏の畠さ埋めておいたから、どこだなんて教えねども、お前だで一生懸命で畠、隅から隅まで掘ってみろ。そうすつど兄弟ではあ、一生懸命で毎日、三尺も深く掘んなねぞ」て、教えただ。そして一生懸命で掘って行ぐども、なかなか出ないずもの。その金瓶。そうすつじど、一人の兄弟、
「おらはそんなことやめた」

て別な仕事についてしまつたど。そのうちにまた別の兄弟、

「昨日も掘つても出ないし、今日も出ながつたし」

一人やめ二人やめして、とうとう辛抱つよいのが、一人になったど。そして隅から隅まで掘つて、掘つた土も唯置かんねから、耕したわけだど。そしたら野菜でも何でもよく出来るど。そして終る頃になつたとき、その息子は氣付いたど。

「父親のいうたのは、金瓶でなく、土を深く掘れば掘るほど、作る物がよく出来るど、こういう教えであつたな」

て、氣い付いて、それから一生懸命で百姓に精出したために、大金持の長者になってあつたけど。んだから人間で真面目に一生懸命に働くもんだど。むかしとーびん。

「集成 178 B 系 二人兄弟」

22 団子どの

むかしあつたけど。

おじいさんとおばあさんといで、ばさまは流しではあ、朝の御馳走づくり、じさまはお庭掃いでだど。そしたら大きな穂一本落ちてたど。むかしは穂一本でも粗末にしねがったもんだから、

「ほう、もつたいない、もつたいない。ばさ、ばさ、こんな大きな穂一本拾ったから、まず、これ搗いで団子でもこしや拵え」

て、こう言うたど。そしてこんどその穂むしつてはあ、団子に作つたど。一つ

ほかで、出ないがったど。まず「上げろ」って、お仏さまさ上げたことだど。お仏さまにネズミ穴あつて、そきコロコロンとまぐつで入ってしまったごんだど。

「おやおや、こんど、ネズミ孔などあつたんだな」

て、じさま、その孔、こんど辿つて団子さがしたごんだど。そしたばずうつと縁の下から軒揚の方通つて、大きな穴開いっただずもの。それからこんど追かけて行つたど。そしたば団子、コロコロンと転ぶずす、

団子どの 団子どの

どこまでござる

新座の宮のこけら葺きの

お堂の石地藏の前まで

て、また「団子どの、団子どの、どこまでござる」「新座の宮のこけら葺きのお堂の石地藏の前まで」て。それから行つてもみたば、なるほど石地藏立つてござつたずも、

「地藏さま、地藏さま、団子来ねがったべか」

こういうたど。

「あまりうまそうな団子一つ転んで来たけがらはあ、食ってしまった」
て、いうずも。

「やれやれ、おれもやつと穂一本見つけて拵えた団子ななであつたけども」
て、こういうたけど。

「ほんでは、まず仕様ないから、食ってしまったけがら、お前に何も礼の仕様もない。おれどさ鬼ども集まつてバクチ打ちするから、今夜はおら家さ泊まれ」て。

「その鬼どもの金でも持たせてやつから」
て、こういうたど。そして、

「この屋根裏さ隠つてで、ニワトリの真似しろ」

て、こう言うて教えだど。そうすつど、地蔵さまのうしろの方から、屋根裏さ登つたごんだど。そしていたば、夜になったか、こんど来たずうもの。赤鬼に黒鬼に、青鬼に。

「なんだ、地蔵さま、地蔵さま、人くさいでないか」

て、来たど。

「人なんて、いねんだぜ」

て、こういうたど。

「いや、何だか人くさい」というと、「人など来ない」「ほだが」。そうして、丁だ半だて始めたど。ほうしているうちに大抵、一番どりええかなあと思つて、板ばパタパタ、パタパタ、コケコーというたど。

「ほう、何時の一刻なもんだなあ、ほら一番どり鳴いだぞ」

そして、いまちいと経うずど、パタパタ、パタパタ、コケコー。

「はあ、二番どりだ。さあ夜明けっから、この金などしまつてゐる暇ない。地藏さま、また来っからはあ、このまま行くぞ」

て、みんな行つてしまつたど。そしたば地藏さま、

「じさま、じさま、降りてこい。みな鬼共、金おいて行つたから、早くこれ持つて家さ帰れ」

て、そうしてはあ、それもらつて家さ歸つたど。そしてばさまにそれ見せつた

ど。そうしたら、隣のばさま来たずもの。

「お前^みたち、こらほどの金、なじよしてもうけてやった」

「いや、おら家^えのじさま、団子一つさ追かけて行つて、地藏さまにもらつて来たど」

て、こう教えだど。そしたば、

「ほんでは、おら家^えのじさま、のらくらと何もしないでいつから、団子でもこさえて、んでは、おら家^えのじさまもやんなね」

て、そして家さ行つて、まず米櫃あちこち集めれば、一つこさえだごんだど。そうしてその孔さ入つてやったども、なかなかまぐれねずも。んだども、じさまゴロゴロとはあ、転ばし転ばし行つたど。そして行つて、地藏さまやつぱし立つてござつたど。

「地藏さま、団子来ねがつたべか」

「いや、来たけ。そらそこにある」

つうずもな。

「ほだども、今頃来たでは、お前帰らんねべから、おら家さ泊まれ。そしてこんど鬼共きて、バクチ打ちするから、この天井裏さ隠つで、ニワトリの真似しろ。そうせば鬼共帰るから」

ていうて、やっぱり教えだど。そしてそのじさまも登つていたど。そうすつどまた鬼共きた。

「フンフン、やっぱり何だか昨夜ゆんべなから、地藏さま、人くさいな」
こう言うど。

「そんなはずないどもな」て。

「何だて、昨夜な、頼んで行つた金もないし、おかしいぞ」
というど。

「いやいや、そんな、人など来ないども、お前だ考え違いだべや」
ていうたど。そしてそのうちに、「ほだか」て、また始めだど。そうするどはあ、じさ、ええ頃だと思つてはあ、「コケコー」なてはあ、いうたど。

「何だか、今夜のとりは下手なようなトリだども、一番どりだな」

なて、やっていっずもの。ほうして、つうと経^{もよ}うどまだ鳴いだど。

「二番どりだ。夜明ける。さあ早く帰んねねで、まず、あの金、また頼んで行く」
ていうど、じさま喜んではあ、ケラケラと笑ったそうだ。

「そら見ろ、地藏さま、人いたから…」

つうもんで、「そら、探せ」ていうもんで、探さつでしまつたど。そうしてこんどはあ、引っぱり落さつではあ、

「おれあ頭食う、おれあ足食う、いやおれは背中の方だ」

なんてはあ、みんなではあ、あっち刺し、こっち裂きして食^かつてしまつたけど。

ばさまは待てど暮せど、じさま帰つて来ながつたで、そしてはあ、ばさまもさびしく過してやつたけど。んだから人の真似なのするもんでないけど。むかしとー
びん。

「集成
184 地藏浄土」

23 ねずみ浄土（1）

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいで、じんつあは山さ火野^{かの}うないに行つたど。一生懸命でうなつてはあ、昼飯^{ちゆうはん}食つて、木の根っこさ腰かけて、昼休みしつたど。そしたば根っこの下の孔から、ねずみ一匹ちよろちよろと出はつてきて、「ええ空だ」てそういうど。そうすつど、中から大勢のねずみが、こんど莫^こ薩^ざ引っぱり出したど。そしてこんど、地蔵さま持つてきて立てたど。それからその莫^こ薩^ざひろげで、金いっぱい持つてきて干したど。ぞろりとその莫^こ薩^ざの上いっぱいに。

そうすつど、じさま、そつと根っこから降りて、その金、弁当風呂敷さ包んで家さ帰つてきたど。そうして、

「ばさ、ばさ、今日はこういうええことあつた」

て、見せつだど。そうすつど隣のばさま来て、

「なんと、お前^みたち、こらほどのお金、なじよしてもうけやった」

「おらえのじさ、火野うないに行つて、これこれで、ねずみの干したな、さらつて来たど」

て、こう言うて教えたど。

「ほんでは、おら家のじさまもやんなね」

て、家さ歸つて行つてはあ、じさまに教えたど。そうしてじさまもそこまで行つたども、火野もうなわねで、根つこの上さ休んでいたど。そうすつどやっぱりお天氣なもんで、ねずみ、また出てきて、「ええ空だ」ていうど。またぞろぞろと出てきて、地蔵さま持つてきたど。そのうちに、じさま小便出てきたずも。降りてたればええごどに、木の上からジョウジョウとたれだど。そうすつど、

「地蔵さま、地蔵さま、雨降つてきた。教えておくやい」

て、地蔵さまは、

「雨降つてきた、雨降つてきた」

て、教えたわけだど。そうすつど、ねずみ出てきて、みんな金しまったど。そんで、ただ歸つて来たど。人の真似してもうけんべなんていうことするもんでな

いど。むかしとーびん。

「集成
186 鼠浄土」

74

24 ねずみ浄土(2)

むかしあつたけど。

じさま、おにぎり、孔さ落してやって、それを拾いに入ったら、それ、ねずみの家で、そしてねずみの家で挽臼^{するす}で金搗きしつたど。

百十になるまで

猫の音聞きたくない

ザクモク ザクモク

じさま、手使つて搗いて呉つて、そして駄賃にお金もらつてきたど。そしてまた隣のばさまが、やつぱり出てきて、じさまがいうど、そのじさまが真似して、行つたつて。そしてこんど搗いて助け^すだども、

「これ、あるだけ持って帰られる」

て、猫のまねして、ニャオーて言ってしまったど。そうすつど、

「さあ、猫来たから、孔くけろ」

て、みんな孔くけらつで、その中で、じさま死んでしまったど。むかしとーび
ん。
「集成 186 鼠浄土」

25 行けざんざんの梨

むかしあつたけど。

おつかあが、また子ども生みそうになつたど。ほしたば、行けざんざんの梨食
だいていうずも。親父あ、

「ほんでは、おれ行つてもいで来つから」

そういうて出かけたど。して、ずうつと行つたば、年寄つた白髭おの生やしつた

じさまに行き会った。はいつどき、

「行けさんさん行く道、ここであつたべなあ」

ていうたば、

「ほだぜえ、ほだどもこれから行くど、大きな牛寝でつから、その牛、尻追つて、一ぺんで起きだら行けばええし、起きねばもどれ」

そして、その次にこんど、

「大きな藤づる張つていつから、それdeenと踏んで、切れたら行けばええし、切れねば行くなよ。ほして滝あるどさ行つて、行けさんさん、行けさんさんていうたら行けばええし、戻れさんさんていわつたら、もどれよ」

て教えらつたど。そうして行つたば、ほの大きな牛寝つたずもの。「シーシー」て追うども、決して起きねど。

「あらあ、起きねつたて、行つたてもええがんべ」

どて行つたど。ほうして行つたば、ほに、太い藤つる、道さ張つてだずも。「deen」と、二度も三度も踏んでも切れねども、

「さしかえないべ」

て思つて行つたど。ほしたばなるほど大きな滝あつたど。へもどれざんざん、もどれざんざんゝて、その滝は聞えるずも。

「なえだて、ちようどこの上側だもの」

て思つてはあ、登つて行つたど。ほして行つたば、いや、実^なつてだにも。ほれから登つてもぎ方しつたば、ほに、にわかになつてはあ、お雷^ななど鳴つずも。んだども、もいでだらば、こんどはあ、向うの方からピカリピカリと光るもの見えつど。何だと思つたらば、それが梨の木の下さ来て、

「この梨もぐ者、上から呑むべか、下から呑むべか」

なていうずもの。いや、恐^{おそ}つかなくてはあ、親父はふるえて、梨さしがみついたど。そうしたば登つてきて、ツルツと呑ま^くつてしまつたど。

ほして次の日になつても来ねもんだから、おつか、ほら心配すつど。ほしたら兄^あんにやつこは、

「おれ行つてみっから…」

て、そういうて出かけたど。そして行つたば、また年寄りに行き会つたずもの。

そしてそういう風に教えて呉つたど。

「牛起きねば行くな」

て。ほして行つて、牛（シツ）と追つたば、一ぺんにもくつと起きだど。ほして次に行つて、藤づる（デン）と踏んだば、プツンと切れだど。

「いや、ええがったども」

て、滝の下さ行つたば、（行けざんざん、行けざんざん）と聞えるずもの。

「ああ、ええがった、ええがった」

て思つて、行つてはあ、梨もぎしつたど。ほしたばまた、そんなでも曇つてきたずなだもの。ほうして向うからピカリピカリというもの来て、その下に来て、やっぱり、「上から呑むべか、下から呑むべか」ていうずもの。その子はきかない子どもであつたべちゃえ、山刀さげて行つたんだど。

「どつからでも呑め」

ていうたど。そうすつどワサリワサリと長黒い光るものは、ひとつ目の化けも

まなぐ

のて昔はいうたもんだ。それであつたど。そして登つてきて、手、つん出ずど、その手はあ、山刀で切つたずもの。そうすつど下さドスンと落ちつど、明るくなつたど、ほうして行つたば、わけのわかんね大きな化けものだけど。そうして今度はあ、兄んにやこ、山刀で首さとどめ刺して、そしてまず、

「親父、もしや生きつたかな」

て思つて、腹さいてみたど。ほしたば生きてであつたど。

「ああ、ええがった、ええがった」

て、はあ、梨は一背負いもぐ、父親の手ひかえではあ、家さ帰つたけど。行けちゅうどさは行つて、もどれて言わつたらもどるもんだけど。むかしとーびん。

「集成
176 奈良梨とり」

26 花咲じじい

むかしあつたけど。

草すず、豆すずというじさまがいであつたど。草すずというのは意地わるじいさんであつたど。それから豆すずというじいさんはええじいさんで、川さ築^{やな}かけたど。そして頭^{かしら}さ豆すずじいさんかけたら、大変魚とれるど。そしたら草すず、「そんでは、おれも頭さ掛けんべ」

て、また頭さ掛けたど。そしたば、くいごこ引つかかつたど。

「こいつけなもの引つかかつて、魚でも引かがんねで」

て、投げてやつたど、尻さ。そうすつど、豆すずじさま築さ引つかかつたど。

そうして豆すずじさは、

「今朝は、なんぼ引つかかつていたかな、魚」

て行つてみたば、ちっちゃいくいごこ引つかかつていたずも。

「いや、めんごいこと、これ持つて行つて、飾っておくべ」

て思つて、家さ持つてきて、大事にわが子のように育てておいだど。そうしたば、だんだん大きくなつてはあ、じさまが山さ木伐りに行くていえば、

山刀^{なた} つけろ くえんくえん

ミノ つけろ くえんくえん

ていうど。かわいがつていたば、ある日、

鋤 つけろ くえんくえん

かます つけろ くえんくえん

そういうずもの。そして鋤、背中さつけたらば、

じんつあものれ くえんくえん

そうしてのつたれば、裏の畑さつれて行つたど。そして畑の隅^{すま}こさ行つたば、

ここ掘れ くえんくえん

ていう。それからじさま一生懸命になつて掘つてみたば、大判小判ざぐざぐと出てきたど。そしてはあ、かますにどっさり詰めて、そうして家さ来てやつたど。そしてその大判小判出して、ばさまに語つて聞かせつたどこさ、隣の草すずじさ

来たずも。

「おや、豆すず、豆すず、こらほどの金、なじよにして儲けた」

「いや、おらえの犬は、これこれで畑の隅こ掘ったば、こがえに出てきた」
て、そう言うて教えただ。

「おれにも貸してくんねえか」

「ああ、ええどこでない、持つて行け」

そして借りで行ったども、つけろと言わねずもの。んだども、無理矢理鋤にかますにつけではあ、行きたくもないなあ、引っぱって行っただ。そして掘れともいわねな掘ってみただ。そうしたば、牛の糞だの馬の糞ばり出てきてあっただ。お金出て来ねずも。

「こんな犬はこうして呉れる」

て、鋤で叩いて殺してしまっただ。そしてはあ、そこさ犬ば埋めて、掘ったのさ、しるしに松の木一本植えてきただ。そしてきて、

「豆すず、豆すず、あんな犬は嘘つき犬で、とても駄目だから、殺して、おれ埋

めてきた」

「いや、むごさいこと、さっだもんだなあ」

ていうたば、

「しるしに松の木植えてきたから、行ってみろ」

て、こわいわっだつて。そうして行ってみたら、見てるうちにその木がぐんぐん、ぐんぐん大きくなつたど。そうして大きくなつたもんだから、じさまは伐つてきて、挽^{するす}臼作つたど。そしてばさまと二人で、

松の木ズルスの コンズルス

よう噛め よう噛め

て、そういうて挽いだど。そうしたば、じんつあの前さは大判、ばんちやの前さは小判も出て来たど。ざぐらざぐらと挽くたびに……。そうすつどまた隣の草すずじさま来て、見て見つけでしまつたど。そうして、

「豆すず、豆すず、そんなええ挽臼だら、おれにも貸してくろ」

て、また借りて行つたど。そして挽いだど、ばんつあ。そうしたば、ばんつあ

の前さは牛の糞、じんつゝあの前さは馬の糞しか出ないずも。こんどまた怒って、それぶち割ってしまつて、竈さくべてしまつたど。そうして豆すずじさま、何日経つても返しにこねもんだから、

「おれの挽臼返してくろ」

て行つたど。そしたば、

「あんな挽臼あるもんでない。出るものは糞ばりだ。ほだからはあ、焚いてしまつた」

て、こつたうたど。それから、

「困つたことさつだもんだな」

「そこに灰あつから持つて行げ」

て、こつたわつた。それから灰、箆ささ入つて、まず貰つてきて、軒場さ置いたど。そのうちに風吹いてきて、向い山さとんで入つたずも。そしたばまだ桜の花も咲かないうちに、花咲いたど。その木さ。

「いや、これは面白い灰だ、そのうちに殿さまここ通りかがつから、一つ花咲か

せてみせんべ」

て、その豆すずじさま、箆さ入った灰持つて、殿さまの通る日待ちでいだと、木さのぼつて。そうすつど殿さまは遠くから「下に、下に」と来たと。そうして、

「そこにいるじじい、何じじいだ」

て、先払いがいうたど。

「花咲かじじいだ。枯木に花を咲かせる」

て、こういうたど。

「それでは、一つ咲かせてみよ」

て、殿さまが言うたど。そうすつど、

チチンブンブン 五葉の松

て、その灰をふつたど。そうしたば、ぱあつと咲いたど。いや、殿さま扇ひらいて、「これはみごど、みごど」て、お賞めになつて、宝物どつさりもらつて来たど。そうして家さ来て、ばさまに見せたば、また草すずじ来て、

「こんなにたくさん宝、なじよしてもうけた」

「いや、殿さまに、お前どこから持ってきた灰で花咲かせて、もらってきた」
て、こういうたど。

「よし、そんなでは帰りに、おれもしてみんべ」

そして残った灰かき集めて、箆に入れて、登って待ってだど。と、殿さま、帰りに、「下に、下に」て来たど。それから先払い、また見つけて、

「そこにいるじじい、何じじいだ」

「花咲かじじいだ」

「それでは一つ咲かせてみよ」

ていうたど。じさまはいう言葉も知しやねもんだから、ただ無性に投げだど。そしたばさっぱり花咲かねで、殿さま、咲くかと思つて上見た目さ入ってしまったど。

「いや、これは、にせ者だ、早くしげれ」

ていわつではあ、そのじさま縛らつてしまつたど。んだから、なんぼ人はええごんでも、人の真似はするもんでないど。むかしとーびん。

27 福の神

むかしあつたけど。

あるとき、福の神さまが、そこらのええ家をのぞき見して歩つてたど。

そしてある家の夕飯おまどきであつたど。今のようまに電気釜などない、鍋で炊く時代なもんだから、御飯煮立まつてくつど、そつちふくれあがつたり、こつちふくれあがつたりするもんだから、飯箸までかきならすわけだ。

そして、こんど、どのていど、やわらかいか、固いか調べるなな、それ、こんど一人のおかみさんは、はさんで一粒の御飯つぶしてみて、また元の鍋にもどしたど。

そして、隣家さ行つて、また見たど。そしたば、そこのおかみさんは、箸でやつ

てだな、一つぶとって、ふにやふにやと食べてしまったど。

「こんな不精な家さは立ち寄らんね」

て、さっきの、つぶして返した家さ寄んなねって、神さまはその家さ寄ってあつたど。

んだから、たとえ人いねったても、不精なことするもんでないど。

むかしとーびん。ぴったりさんすけ釜の蓋、灰で磨けばええ銀玉、なあ、さんすけふんはい。

「集成 199系 大歳の客」

28 舌切り雀

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやどいでやったど、そしてじんつあは柴切りに行く、ばさまはせつせと継ぎものしたり、糊つけたり、働いてあつたど。そうしてある日、じ

さま、雀こ一羽とってきたずも。そしてはあ、子ども持たないんだし、大事に籠さ飼って育てておいだどご、籠から出て餌呉つても逃げて行かなくなつたど。そして、ある日、

「ばさ、ばさ、雀の餌忘れんなよ」

て、また山さ行つたど。そして外さ出して遊ばせて、ばさま、ええ空だし、糊つけんべと思つて、糊こさえておいて、そしてこんど、ばさま、布地見てるうちに、雀糊なめたもんだじも。そしてうまいもんだから、あらまし舐めてしまつたど。それ、ばさま見つけて、こんど、

「なんだ、この野郎。にさか、舐めたな。待て待て、そんな悪いことする、舌など切つて呉れっから」

て、ハサミでちよつきり、先の方切らつてしまつたごんだずも。そして、

「どさでも行げ」

なんて飛ばしてやつたど。そしてはあ、鳴き鳴きとんで行つた夕方、こんど、じさま帰つてきたどさ、いねもんだど。そうすつど、

「ばさ、ばさ、めんごはどうした」

「おれ、糊つけすんべと思って、こしやった糊なめだから、舌切って飛ばしてやった」ていうど。

「やれやれ、かわいそうなこと。そんでは、おれ探しに行つて来んなね」
て、そして、

「どっちの方さとばしてやった」

「そっちの方だ」

なんていうもんだから、そっちの方さ行つたど。つかれて来たもんだから、杖
棒ついで、

舌切りすずめ お宿はどこだ

舌切りすずめ お宿はどこだ

て行つたば、竹やぶあつたど。そうしたばいっばいの雀がちゅんちゅん、ちゅ
んちゅん出てきて、

「おじいさん、よく来て呉つた。めんごのお宿はここだから、寄つて呉ろ」

ていうずもの。そして寄ったらば、

「その舌もよつぽどよくなつた。いたみもとれた」

ていうずも。そして、

「ええじんつあだから、みんな御馳走してくろ」

てはあ、御馳走して、雀踊りなど見せてはあ、御馳走なつたど。そして「泊まれ」て、泊めてもらつて、「帰つて行く」ていうたらば、

「お土産くれる。大きなつづらええか、軽いちつちやいつづらええか」
ていうたら、

「年いって、重たい大きなもの、背負わんねから、ちつちやいな呉ろ」
て、そういうたど。そしてもらつてきて、家さ来て、こんど、

「ばさばさ、雀の家さ泊つてきた。そしてこういうお土産もらつてきた。何入つたか開けて見っだい」

て開けたど。中から絹の着物だの、さまざま軽いものなどはあ、いっぱい出てきたど。ええもの。そうしたば、ばさま、

「ほんでは、おれも行つてみて来んなね」

て、次の日、こんど、ばさま行つたごんだど。そしたばあまり出迎えても呉んねがつたじども、「よく来た」ぐらいなこと言つたべちやえ。そしてばさまも御馳走になつてくるといふたど。泊れて言わんねんだから、夕方くるといふたど。

「お土産くれる。大きい重たいつづらええか、小さいつづらええか」

「力持ちだから、重たいなええ」

ていふもの。そして大きなもらつて背負つて来たずも。途中まで来たら、あんまり重たいし、開けてみたごんだど。そしたば、蛇だの百足だの蜂だの、いっぱい出はつてはあ、ばさまば刺すやら喰付くやらしたごんだど。ばさ、切ながつて泣き泣き家さ帰つてきたど。血だら真赤になつて。じさ、夕方、飯炊いて食う頃だと思つて眺めだば、向うの方から赤いぐなつてはあなあ、音すつずも。あんな赤い衣裳もらつて唄などうたつて来たぜと、こう思つていたど。そうしたば血だら真赤になつて、泣き泣き来たなであつたど。そして、「なんだまず、ばさま」といふたら、

「いやいや、これこれであつた」

ていうたど。んだから慾かいだり、あんな小さな者の舌など切るもんでないぜつて、じさまにさとさつたど。むかしとーびん。

「集成 191 舌切雀」

29 こぶとり

むかしあつたけど。

右の頬つぺたにこぶのあるじいさんと、左の頬つぺたにこぶのあるじいさんと二人いでやつたど。

右の頬つぺたにこぶのあるじいさんが、山に木伐りに行って、一生懸命で伐つてゐるうちに、雨降ってきたど。そしてこんど木の洞穴に入つて雨宿りしているうちに、夕方なんだから、眠つてしまつたど。そしてひよつと目覚めたら、目の前

があまりににぎやかなもんだから、何だと思って見たら、鬼共が集まって、一生懸命で酒盛りはじめたど。そのうちには飲めや唄えや踊れの、鬼共の宴になったつて。もともと踊りの好きなじいさんなもんだから、ついふらふらと出でつて、踊りに加わつて踊つたつて。

「いや、これは上手なおじいさんだ。明日の晩あしたげも来いよ」
て、そう言わつだつて。

「いや、明日、とても来らんね」

「来い、来るか来ないか、はつきり返事しろ」
ていうども、じさま、

「やれ、分わからね」

て、こういうたど。そんでも来るようにと、

「大事なものを、置いて行け。お前の大事なものは何だ」

「こぶだ。何よりも大事なものだ」
て、こういうた。

「そんでは、それ置いて行げ」

て、ぼつんと取らっでしまつたど。そしてはあ、じさま嬉しくて、うれしくて家さ帰つたど。そしてばさまに、

「ばさばさ、山さ行つて、昨夜泊ゆんべなつたども、こういうあんばいで、洞穴にねてだば、鬼共踊つて、そさ嵌はつて踊つたば、また明日の晩ばんげ来いよつて、こぶとらつて来た。ほんでええ男になつてきた」

て教えたつて。そうすつど、隣のばさまきいて、

「そんでは、おら家のじんえつあもやつて、とつてもらわなね」

かういうて、隣のじさまも行つたど。そしてはあ、その洞穴さ入つて待ちてだど。そしたら鬼共また集まつて歌い出したど。そして踊りも始まつたど。だが、そのおじいさん、あまり上手でないがったど。

「いや、これはにせ者だから、お前の頬つぺたさは、このこぶ喰付けてやる」

て、ぺたんと、ない方さ喰付けらつて、二つ下げて泣き泣き帰つてあつたど。自分でできないような人の真似するもんでないど。むかしとーびん。

30 猿 地 蔵

むかしあつたけど。

じんつあとばんつあといで、じんつあ、山さ火野^{かの}うないに行つたど。ばんつあ、「くたびつた時、じんつあ食えよ」て、ノリモチはたいで、じんつあに持たせてやったずもの。そして一生懸命でうなつたから、

「御飯食つて、寄越して呉つたノリモチでも食つて、昼休みでもすつか」

なんて、それ食つて、口のあたりさ粉つけて昼休みしつたど。そしたらやぶから猿たちがガサガサと出てきて、

「おいおい、ここさ地藏さま眠つたから、持つて行つて、おら家の宝物にすつぜえ、おらだ」

そうして、じさま、手^てぐるま^まのせて、連れて行^いったど。そして行^いったら、大井川^{おおいがわ}さ行^いったど。そしたら猿^{さる}たち、尻^{しつ}くらんとむく^くつて、漕^こぎ出^でしたつて。そのうちにおじいさん、何か下^{くだ}げ^げたど。そしたら、

「下^{くだ}ったは何^{なに}だ」

て、一匹^{いっぴき}の猿^{さる}はい^いうたど。次の猿^{さる}は、

「延命^{えんめい}小袋^{せうぶく}に、打出^{でうち}の小槌^{せうすゐ}」

ていう。そのうちにおじいさん、尻^{しつ}ふうとた^たったど。

「鳴^{なり}ったのは何^{なに}だ」

「時の太鼓^{ときのだうこ}」

て、おかしく、しょうないども我慢^{まんまん}してだど。そして自分の家^{いへ}さ着^きいではあ、猿^{さる}だち、床^{とこ}の間^まさ、おじいさんば飾^{かざ}つて、お金^{かね}を持^もつてきたり、御馳走^{ごちそう}をもつてきたりして、上げ申^{まう}して呉^{くれ}れだど。いっばい溜^{ため}ったところで、じさまそれ背負^{せお}つてはあ、猿^{さる}のいない後に家^{いへ}さ逃^にげて来^きたど。そして、

「ばさ、ばさ、今日は面白^{おもしろ}いことあ^あった。ノリモチもら^{もら}つて行^いったな食^くつて眠^ねつ

だば、地蔵さまと間違えて、猿だち、おればかつねで行つて、こらほど御馳走や宝物上げて呉くつだからはあ、それ持つて逃げてきた」

て、ばさまに見せて二人で楽しんでいたど。そうしたば、隣のばさま来て、

「お前たち、こらほどの錢だの何か宝物、なじよにしてもうけやつた」
て聞いてたて。

「おら家のじんえつあは、これこれであつたど」

て、ばさま教えたど。ほしたら、

「おらえのじさ、寝てばかりいっから、やらんなね」

て、家さ帰つて、

「隣のじさなど、これほどまず何かもつて来たから、お前も早くそこさ行つて眠てろ」

て、ばさま、ノリモチ、早く一生懸命ではたいて、持たせてやつたけど。そしてじさまは畑うなわないで眠てたど。

やっぱり、猿だち出てきて、

「いやいや、おいおい、こないだ逃げた地藏さま、また此処にいたがら、持つて行くぜ」

て、手ンぐるまさのせで出だしたど。そして大井川さ行くど、また尻むくつて「ホイホイ」て、

「猿のふぐり濡れても、地藏のふぐり濡らすな、ホイホイ」
て、漕ぎ出したど。

「下がったは何だ」「延命小袋に打出の小槌」
そのうちにまた出たど。

「鳴ったのは何だ」「時の太鼓」
じさま、とても堪え切れないで、フフフと笑ったど。そうすつど、

「これは、にせもんだ」
て、一番深いどこさ、ゴボンと投げらつでしまったど。んだからずるいこと
でなく、人の真似したりしないで暮すもんだけど。むかしとーびん。

31 鼻たれ地蔵

むかしあつたけど。

あるところに、じさまとばさまがいて、じさま山さ行って、あんまり喉乾いたので、かげの方さ降りで行って水探したど。んだども、水、沢に流れていねがら、どこらにあるかと思つて探しているうちに、地蔵さま見つけたど。その地蔵さまから鼻水、たちん、たちんと垂つでいたど。

「それでもええから、飲^{から}んでみたい」

て思つて、弁当食べた空に溜^{から}めて飲んだど。とつてもうまい砂糖水のような鼻水だったど。

「ええ地蔵さま見つけた。家さもつて行つて飲むべ」

て、そう思つて、地蔵さま背負つて来たど。そして床の間さおいで、

「ばさまに見つけらんねようにしなね。あんまり垂んねから」

て、そう思つて床の間に置いて、そして弁当、その下さ置いて、溜^{から}ったところは

そつと行つて飲んでくる。唇舐めなめ出てくるもんだから、ばさま、おかしいと思つたど。そしてじさまが仕事さ出た後に、上段に行つてみたら、地藏さまの鼻から、水たちんたちんと垂つてだど。

「これ、じさま、舐めんなであつたかな」

て、そう思つて自分も飲んでみたど。大変うまがつたど。

「いや、こんなうまいもの、たちんたちんでなく、いまといっぱい出して飲まんなね」

て、そう思つて、焼け火箸つくつたど。そしてこんど、地藏さまの鼻の穴さ焼け火箸、ジーンと刺してやつたば、キヤーツと、高窓破つて逃げて行つてやつたど。そしたば、じさま仕事から帰つてきて、また水飲むべと、

「実は、おれ、なんだかおかしいと思つて行つて、飲んでみたば、あんまりうまいし、いっぱい垂るように焼け火箸、鼻の孔さ突つ通したら逃げて行つた」
て、そういうたど。そういうたら、

「このばば、とんでもないばばだ。お前の鼻さも刺してくれっから」

て、そういわつて、じさま怒つてやつたど。

んだから、お互いに隠しっこなどしないで暮すもんだど。むかしとーびん。

32 播粉木の音と掃く音のきらいなじさま

むかしあつたけど。

あんまり仲のええぐないじさまたちいでやつたど。そして、

「お前、まず、一番、何きらいだ」

て、そういうたど。そしたら、意地悪じさまは、

「おれは、朝げ播粉木で味噌する音と、座敷掃く音が大嫌いだ」

て、そういうど。一人のじさまは、

「おれは、小判は大嫌いだ」

て、そういうたど。そうしたら、意地わるい方は朝げ早く起きで行つて、朝げ

の座敷掃く音きらいだという家さ行つた。座敷ざあざあ、ざあざあと掃いて、そして挿鉢さ味噌入つて、がえろがえろとすつたど。そしたば、

「いや、恐つかない、恐つかない。嫌いだからはあ、やめて呉ろ、やめて呉ろ」て、蒲団さもぐつたど。じさ、ええ気持で帰つて来たど。そうしたら掃がつた方のじさまは、別な方のじさまのどさ、自分の金、ありつたけ持つて行つて、窓から、「小判だ」て、投げ込んだど。

「恐つかねから、投げねで呉ろ」

て。ありだけ投げて行つてやつたど。むかしとーびん。

33 笠地藏

むかしあつたけど。

むかしのあ、莫座織ったり、笠作ったりして、小国の町さ売り出して暮し立

でっだもんだ。

それ、弥蔵というおじいさんとおばあさんがいて、おじいさんが、その莫蔭と笠売って、正月の買物して来るていうて行つたど。

叶水の向うの子持峠というどこある。そこまで行つたら、地蔵さまが正月頃だから、みぞれに打たれて寒そうにしていたど。おじいさんが売るつもりの莫蔭を地蔵さまに着せて、売るつもりの笠をかぶせて、家さ帰った。

「ばさ、ばさ、子持峠まで行つたば、地蔵さまが寒そうにしまったから、莫蔭着せて、笠かぶせてきたわ。正月の買物は何も出来なかつた」

こういうた。と、ばさま、

「ええがつた、ええがつた。おれたちはこうして家にいるから」二人で話して何もない年夜をしたわけだ。むかし、年夜根っこ、年取り根っこというて、割れない木をくべたものだ。その根っこで背中あぶりして、「二人でねんべ」て、寝たど。そうすつど、音きこえた。

やんぞうの屋形 どくだべな

エンヤラサ ドッコイシヨ

て、村の若衆、何ふざげていんなだか、て二人で語っていた。そのうちに、
「ここだ、ここだ」

て、戸を開ける音して、ガラガラ、何か土間さ入れて行つた。そして元日の朝
げ起きてみたら、着物から、アキアジ（鮭）だの、いっぱい御馳走あつた。地
蔵さま恩返しに來たなだなどといった。むかしとーびん。

「集成 203 笠地藏」

35 浦島太郎

むかしあつた。

ある日、太郎と名ついた人が、浜辺さ行つた。そしたば子どもら集まつて、
亀おさえでいじめつた。結^ゆつけて引っぱつたりして。

「こらこら、にさだ、むごさいから、その亀いじめねで、おれに売んねが」

て。むかしのごんだから、一銭か五銭に買ったわけだべもの。そしてこんど、放してやったど。

なんぼか釣りの好きな人で、そしてまた釣りに行つたど。そしたら大きな亀あらわれて、

「あの、浦島さん、浦島さん。おれは、いつか助けてもらった亀だから、その礼に、竜宮さ御案内すつから、おれの背中さのつて呉ろ」

て、そういうずも。そして太郎は喜んで、そんなところさ連れでつてもらわれるなんて、仕合せだと思つて、のつたど。そしたば波越え、水の中くぐつて、連れて行がったど。そうして行つたところが美しい御門のどこさ着いだごつたずも。そしたらさまざまなお姫さまがお迎えに出て呉つて、

「よく来ておくやつた」

て、はあ、喜んでその御殿さ上げてもらつたど。そして、

「乙姫さまという人さ会わせつから」

て、乙姫さまという人の前さ連れて行がったことだど。そしたば、乙姫さまも大変喜んで、「人間なんていう人に会われた」て、大変御馳走呉っではあ、踊りおどらせたり、その侍女たちに。毎日、御馳走して呉れたごんだずも。あんまりそういうこと毎日してもらったば、退屈して飽きてしまったど。そして、

「乙姫さま、おれも大抵にして家さ帰りたいから、家さ帰してくろ」
て、願ったど。そしたら、

「何にもお土産くれることできないから、この玉手箱くつでやつから、これを、よほどのことない限りは開けないように、このまま持つてろよ」

て、そういうて貰ってきたど。そしてまたその亀、迎えに来て呉ったもんだから、のせてもらつて自分の家さ帰ったど。そして自分の家さ帰ったつもりだども、自分の家さがしても見当んねがったずもの。隣近所きいてみんべと思つても誰も、「そんな浦島太郎なんて、この村にいでやったべか」
ていうずなだも。

「何だべ、ここのようだが、おれの生れたところは…」

て思つて探してみれば、山や川はそうなようだけれども、人はみな別なようだけれども。そしてあんまりさびしいし、何入ったもんだかと思つて、そのふたとつてみただ。そしたば煙ぽーと出てきてはあ、自分の髪、白髪のおじいさんに、煙でなつてしまつて、そしてはあ、ますます誰にも分なくなつてしまつてあつたけれど。三年だと思つて暮しつたども、三百年にもなつていたんだけれど。むかしとーびん。

「集成 224 浦島太郎」

36 糠 福 米 福

むかしあつたけれど。

あるどこに糠福という子ども生んで、おつかさ死んでしまつたけれど。そして後添えもらつたど。んだげんど、そのおつかさにも子ども生まつただから、米福と名付けだんだど。

して、大きくなつど、おつかさ、自分の産なした子どもばっかりめんごがつこんだずもの。衣裳でもええなは米福に買つてくれつど。して、秋になつて栗いっばいになつた頃、

「お前だ二人で栗拾いに行つてこい」

て言いつけて、糠福には袋さ孔あいたな持たせて、米福にはええ袋持たせてやつたけど。ほして、糠福拾うども、何だか溜んねと思つたば、孔あいていだんであつたずも。ほして、米福は、

「姉ちや後さ、くつついで歩くと拾われつこで」

て、おつか教えてやつたもんだから、後くつついて歩くと、その孔から落ちたな、ずうつとあつこんだずもの。んだから米福は一時いっときに拾つてしまつたど。

「姉ちや、おら、いっばいになつたがら、おら行ぐはあ」

て、米福は家さ来たずす、糠福はいっばいになんねで、ほして栗林の傍に沼あつどこで、しょんぼり涙こぼしていたど。そうしたばその沼の水、がほがほ、がほがほと動いたと思つたれば、大蛇現われだつうものだもの。糠福は恐っかながつ

て逃げんべと思つたら、

「逃げつことないぞ、お前のおつかだ。お前ばむごさくて、おれ浄仏さんねで、こうしていたなだから」

て、そういうずも。そしてこんどあ、おつかになつて傍さ来たど。延命小袋と打出の小槌呉つたなだけど。そして、

「お前、困るようなことあつたら、この打出の小槌ふれば、何でも出るからなあ」
て、そう言うて呉つたど。

それをもらつて、まず、栗ば早速袋一つにして家さ帰つたど。ほうしたば、
「糠福、何のごんだ。今ごろ、米福など、さつきだにいっぱい拾つて来たぞ」
て、まずおんつあつたど。

そしてはあ、そのうちに町にお祭りあるごつたずもんで、そこさ芝居師など来るなんて話あつたど。

それ見に、米福、おつかどさ、

「連れて歩えべ^あ」

なんて、喜んで、あ、衣裳買ってもらって、連っつでもらうことになったぞ。

ほれに糠福は、

「この米搗いで、それから来い」

なんてはあ、米搗き言いつけて行つたぞ。ほして一生懸命で搗いっただぞ。ほして、友だち衆も、

「糠福、見に行かねが」

て呼ばつども、

「おれ、この米搗いでがら行くはあ」

て、行かんねつうなだも、一緒に。ほして、ほだどもみんな行つてしまつてから、その米も「早く搗けろ」なて搗いではあ、そして衣裳も自分が着たい衣裳、それ打出の小槌で出して着て、お祭り見に行つたぞはあ。そうして見てたば、こんど米福見つけて、

「おっかさ、おっかさ、あれ、姉ちゃであんまいか、あんなええ衣裳着て来ったわ」ていうたぞ。

「糠福、あんなええ衣裳持たねもの、ほでねえ」

そっちの方で見つたど。ほしてその人の帰んねうちにと思つて、家さ帰つて来てはあ、知しやねふりしつたど。ほしたばそれ見に、隣村の庄屋の息子も行つて、その糠福ば見染めだずも。そして、

「あれ、もらいたいもんだ」

なていう話になつてはあ、その家さもらいに來たど。ほうしたれば、

「そんなの、おら家の糠福でねえ、米福だべ」

なて、おつかさは言うずも。

「いや、それでなく、糠福の方だ」

て、そういうど、ほうして糠福ば、どうでももらわねねていうから、呉つたごつだど。

ほして、御祝儀なつじゆうに、衣裳も買つてくんねがつたど。糠福は自分で出して、立派な花嫁になつてはあ、そのあたりは、のりものなてながつたもんだから、馬さのせてもらつて、そうして貰わつて行つたど。

それ見て、米福、

「おつかさ、おらも行きたいな」

て言うずも。

「あんなええ衣裳きて、おれも馬さのつて見だいなあ」

ていうずも。 んだども、そんなこと出ねえんだから、あるうちの一番ええな着
せて、脚立さでものせだかして、引張っているうちに、川さ落して死なせてしまっ
たけど。 むかしとーびん。

「集成 205 A 米福栗福」

37 金の斧銀の斧

むかしあつたけど。

向うの山中のどこに、木伐りを専門にするじさまいでやつたど。そしてこんど、
ある日、川端の大きな木伐っているうちに誤って、斧を川の中さ、ドブンと落し

てしまったど。そして正直なええじさまであった。

「いたましいことした。あれなければ、仕事もできないし」

て、こう一人言いうていたけど、そうしたら川の中から年いったおじいさんが出てきて、

「じさ、じさ、いま落した斧拾ってきてくれるから」

て、そういうたど。そして金の斧をもってきてくれたど。そして、

「お前落したのは、これだか」

て、こういうたど。

「いや、そんな立派な斧でない」

て、そういうたど。

「ほんでは、また別な探してくるからな」

て、入っていつて、こんどは銀の斧持ってきたど。

「お前の落したのは、そんではこれだか」

「いやいや、そんな立派なもんでない。鉄で作った斧だ」

て、こういうたど。そしたらこんど、またもぐって行つて、本当に落した斧拾つてきて、呉つたど。そしてそれと同時に、金の斧も持つてきて、

「お前は正直ものだから、これも呉れでやる」

て、その斧もらつて来たど。そしてそれを聞いて、慾のふかいじいさんが、

「よし、おれも行つて、金の斧もらつて来るべ」

て、こう思つて行つて、斧をわざとドボンと投げたど。そしたらまた同じような白髭のじいさんが現われて、

「ああ、お前の斧拾つてきてやる」

て、こういうたど。そしてこんど拾つて来たのが、金の斧、やつぱり持つてきて、これだがて聞いたど。「ああ、これだか」「それだ」て、そう言うたど。そして、

「この嘘つきはあ、落した斧はそっちの方だ」

て、わざと投げた斧の方与えらつて、金の斧はもらいばぐつたど。わるい心かけではわるいもだど。むかしとーびん。

38 火 車

むかし、あるところに貧乏なお寺があつたけど。そこに年寄りの和尚さんがいて、とら猫を小さいときから育ててかわいがつていたつけど。

ある晩、和尚さんが寢床に入り、うとうとして夢を見たつけど。とら猫が話かけるように、

「和尚さん、和尚さん、ながい間かわいがつてもらつたが、おれも永くは生きられそうもないから、御恩返しに、明日の茶毘に、村一番の旦那さまの娘が死に、あちこちのよいお寺さまが頼まれて来なさるが、うちの和尚さん、頼まんじゃないから、お棺に、立派なお寺の前でお経を上げてる。その時におれがお棺を空に吊るし上げるから、そしたらみんな驚き、もつともつと和尚さん方をたのみ、お経を

上げると思うが、うちの和尚さんが頼まれるまで、決して降ろさないから、頼ま
で行ったら、〈ナムカラタンノワ、トラヤーヤ〉と何べんも何べんも拝むように」
というのだった。

和尚さんが、ふと目をさましたら、とら猫がきちんと枕元に坐っていだっけど。
和尚さんはこんなこと、猫がいうとは思わねえが、と半信半疑で寝て起きたど。
そしてその日、いよいよ茶毘になったけど。そしてお棺が立派なお寺の前に据え
られて、お経が始まったけど。そのうちに、一天にわかにかきくもり、黒雲が舞
い下り、みんな恐ろしくなり、目をふさいだど。そのうちに、お棺がずんずん上
に登って行っただけど。身内の人も皆びっくりして、早く早く、和尚さん方、あり
がたいお経を詠んでおくやいと頼んだど。和尚さん方も一生懸命拝むが駄目だっ
たど。そこである人がもしもあの貧乏寺の和尚さんが、ありがたいお経でも知っ
てつか、頼んでみたら、というど、

「駄目だべや」

という人もあったが、頼んで来たど。そこで和尚さんは、昨夜の夢は、猫が語っ

たなであつたなと気がつき、

ナムカラタンノウ　トラヤーヤ

ナムカラタンノウ　トラヤーヤ

て、何回も何回も大声で上げたど。そしたらお棺がずんずんと降りて、元におさまり、無事に茶毘もすみ、和尚さんがいっぱいお布施もらつて帰つて来たら、とら猫はぐつたりと炉端に寝てだっけど。和尚さんが、

「とら、とら、お前のおかげで、こんなに沢山お布施もらつて来たぞい」

ていうたど。とら猫は、「ああ、これでおれも御恩返しができてうれしい」と言うたど。そして、

「もし、いまちいと和尚さんがおそがつたら、お棺落とすぞだった。ほら、こんなに爪が痛んだんだもの」

て、血だらけの手を見せ、「ああ、よかった、よかった」と言うど、そのままころつと死んだけど。和尚さん、泣き泣き、ねんごろに葬つたけど。それから、あちこちから茶毘があれば、和尚さん、和尚さんとたのまれ、一生安泰に暮した

けど。むかしとーびん。

「集成 230 猫檀家」

39 文 福 茶 釜

むかしあつたけど。

あるところに屑物を買ったり売ったりする一人ものの男がいて、ある夕方、山道を家にいそぐ途中、一匹の狸がワナにかかり苦しんでいるのを見て、

「おお、かわいそうに」

て、ワナからはずしてやったけど。そして家さ帰り、寝て、朝また出かけようと思つたら、籠の中に自分が買った憶えのない茶釜が一つあつたけど。男はびつくりして、

「こんな立派な茶釜、はて、どこで買ったけなあ」

て、いくら考えても思い出せないが、とにかく、おれの籠にあるもの、おれの

もんだべから、よしよし、隣村の和尚さんが、こういうものが好きだから、て持つて行ったら、とても喜んで買ってくれたど。そして和尚さんは、お茶を立ててみようと思ひ、小僧さんによく洗つて水を入れて来るようにて言うたど。小僧さんは「はい」つて、水屋に持つて行つて、灰をたつぷりつけて、ごしごし洗い出したど。そしたら、釜が、

「小僧、小僧、いたいから、そつと砥げ小僧」

といったので、小僧、おどろいて、

「和尚さん、これはなんだか氣持わるくて、あまり砥がんない」

て、おちこち洗つて水入れて持つて行つて火にかけたど。そうしたら、こんどは熱くなつたので、頭は出す、尻尾しりぼは出すで、「あちち、あちち」と逃げ出したど。和尚さんも小僧さんも、いやはや驚き、早く早くと追いかけたが、とうとう逃がしてしまつたど。

狸は狸でおどろいて、こんなところにては殺されっからと、また夜になつてから、屑屋さんどころに行き、寝てる枕元で、こう言うたど。

「とてもあんな恐つかないお寺にいらんないから、戻ってきたから、明日は村の衆を集めてくれ、そうしたら、おれ綱渡りしてみせっから」

ていうたど。屑屋さんはその通りにして、家に綱を張り、自分は扇子などひろげて、

「さあさ、みなさん、文福茶釜の綱渡り」

などと、おどけた格好ではやしたら、みな喜んで、沢山お金おいて、また見物にくるよ、なんて、とても大喜びをされ、男も屑屋をやめて、よいお嫁さんをもらい、一生安泰に暮したつけど。畜生でも恩は知ってるもんだけど。むかしとーびん、さんすけびったり釜のふた、灰で磨けばええ銀玉、なあ、さんすけふんはい。

「集成
237 A 文福茶釜」

40 狐むかし

むかしあつたけど。

大石沢の方にも中津川の方にも、馬喰していて、むかし馬市開くと行つて買つたり売つたりする、馬喰いてやつたんだ。大石沢の馬喰が山に茸とりに行つて休んでだば、狐が二匹集ばつて、

「明日、おれ、馬市あるから、おれは大石沢の馬喰に化ける。お前は馬に化ける、そして馬に化けて、こいつ、おれあ高く売つてきて、ひともうけすつから、そうしないか」

て、狐が相談した。そしたら、大石沢の馬喰、

「これはええこと聞いた」

そして、何時ごろ落ち合うということ聞いたもんだから、次の朝げ、大石沢の馬喰狐行かないうちに行つたつて。そして、

「おいおい、早く行くぞ」

て呼ばったって。

「ほう、うまく化けたな。おい、そのままだな」

て、その馬の狐が言うたって。そしてヒゴザ着て、笠かぶって小国のせりさ行つて、その馬は一番高く小国の金持の伊勢屋という家さ売らったど。そしてその馬喰はその金持って、ほくほくと家さ帰ってきたど。そしたら、狐は厩さつながつてしまったもんだから、逃げ出すに大時間とって、そしてまず杭破つて縁の下を掘つて、ほして、逃げて大石沢の馬喰になる狐のどこさ行つたど。

「この、なんだ。おれ、大難儀した。まず儲けた金、分けっだい」
て、こう言うたって。

「何語つてるや、おれ、行つたときはお前いねがつたでないか」
そう言わったど。

「いや、そんな筈はない。お前、あんがえ上手に化けてきたのに、そんな筈ない」
て、二匹で大喧嘩したど。

「ほだども、ここの馬喰に、おらだはだまさつてしまったのだから、ほんでは今度

は返報がえしして呉んなね」

て、二匹で相談したつて。そしてむかしは馬を利用して、ぶな畑さ朝草刈りに行くのだど。そんな時、そのここの馬喰が、やつぱり馬喰して、夜ぶらぶら通りかがったど。この道な…。そしたらこんど、なんぼかええ女に、行き会ったもんだど。

「こんな夜歩かねで、そこさおら家の家あつから、寄つて泊れ」

て、こう言わつたど。そして一杯きげんであつたもんなだから、泊つたわけだど。そして、

「まず、湯さでも入つて疲れ直すどええ」

て、そう言わつて、湯さ入つて、ええ気分で流したど。そしたば若衆、朝げ早く馬引つぱつてはあ、唄うたいながら、ぶな畑さ草刈りに行つたど。そうしたらその馬喰、裸になつて、そのぶな畑に夫婦沼つて、沼二つあんな、その一つの沼さ入つて、がふりがふりと流していたど。

「なんだ馬喰、そんな朝つぱらから沼さ入つて…」

ていうた。

「何語つてゐる。こんなええ湯ない」

て、入っていただ。

「そんなところは沼だぞ」

て教えらつて、氣について、そしたば沼さ入つてあつたぞ。狐の返報がえしさつだんであつたぞ。

そんな悪いことはするもんでないぞ。むかしとーびん。

「集成

238

狐と博労」

41 三枚のお札

むかしあつたけど。

おら家^えのあたりのようなお寺の小僧^{こぞう}だちいて、二人、裏の山さ、栗拾いに行ぐて言^ゆつたど。そしたば和尚さま、

「うらの山には山姥^{やまば}いっから、このお札呉^くつでやつから、追^おっかけらつたどき、投^なげろよ」

て、三枚お札もらつたけど。そうして二人で行^いつて拾^{ひろ}つていだど。そうしたば晩方^{ばんぽう}なるまで忘^わせではあ、拾^{ひろ}つていたずも。そうしていたば、何^{なん}だか婆^{ばあ}さま来^きたずもの。

「にさだ、こんがえ晩方^{ばんぽう}、帰^{かえ}らんねんだから、おら家^えさ入^いつて泊^{とど}まれ」

て、そういうて呉^くれつど。そんな恐^{おそ}つかない婆^{ばあ}でもなさそうに見えるもんだから、三人で行^いつたど。

そうして、飯^いごちそうになつて寝^ねるごどになつたど。そして寝^ねて、一人の小僧^{こぞう}、

ひよいと婆さんのどこさ手やったば、もじやもじやていうずもの。

「さあ、和尚さまに教えらったなは、このごんだな」

と思つたど。ほうして隣のばつつついてはあ、二人ではあ、

「ばば、ばば、ばっこ出てきた」

て、こういうたど。

「ほだが、さあ、ほだら逃げつど悪れがら、待て。紐結^ゆつけでやつから」

て、そうしてはあ、紐結^ゆつけらつたずも。ほして便所さ入ったふりしてはあ、キンカクシさ、その紐結^ゆつけたど。ばばあ、

「まだだか」ていうと、「まだだて言うて呉^くろよ」て、そういうて逃げだんだど。ほうして婆さま、引っぱって、「まだだか」ていうど、「まだだ」て聞えつずも。ほなもんだから、いだども、何度もしても同じ音すつから、起きて行つてみたど。そうしたば、キンカクシさ紐結^ゆつかつていたずもの。

「野郎べら、逃げたなあ」

て、こんどは追つかけたど。ほうして逃げたは逃げたは、そのうちにはあ、追つ

かづかれそうになつたずもの。ほうすつど、

「火になれ」

て、お札一枚投げたど。ほうしたば、ぼうぼうと燃えたど。こんど婆さま、熱つちえもんだから、しばらくそこ通れねでいるうちに、小僧たち、走つて姿見えなくなつど消えたど。そうすつどまた婆さま、追つかけてきたずもの。こんどは仕様ないから、

「山になれ」

て投げだど。大きな山になつたずもの。それ、婆あは越いではあ、また追つかれそうになつたど。こんどは、

「川になれ」

て投げて、ほうしてお寺き、すたすたと駆け込んだど。したば和尚さま、シュミ檀の下さ隠してくつたど。

そして、婆さま、廊下まで来て、

「和尚、小僧逃げ込んだべあ、出せ」

なて、しやなつど。和尚さま、知しやねふりして、本尊さまにお経上げつだど。
したば、婆、そのお経に負けて逃げて行つたけど。むかしとーびん、びつたりさ
んすけ、かまのふた。

「集成 240 三枚の護符」

42 鬼と豆のくいくら

むかしあつたけど。

あるところに娘と父親と二人いであつたど。なんぼかええ娘であつたど。ほし
たらこんど、山に鬼が、その娘を見込みつけてしまったど。そしてはあ、毎日の
ように、

「欲しいがら呉ろ。欲しいが呉ろ」

て来るごんだど。親父も困り果ててはあ、

「何としたらええもんだか、一人娘、鬼になんて呉くつだぐないもんだ」

と、こう思っていたど。そうして、娘、

「ほだら、おどつつあん、おどつつあん、あの、豆煎りの食いくらしろ。そして負けたら呉れる、と、こういうことにしろ」

て、こういうたど。

「そんなこというて、鬼ぐらいなの食^かんねぜ」

て、こういうたど。

「おれ、何とか工面しておくから……」

て、そう言うて、鬼来たとき、

「おどつつあと豆の食いくらしで、勝ったらもらわで行ぐ」

て、こういうたど。そしたら喜んで、

「あまりええ」

て。それからこんど、娘一生懸命で豆煎って、鬼には娘のところばり見とれて
いるもんだから、知しやねふりして、小石混えて鬼の豆さやったど。こんど固く
煎ってやったど。父親は、柔^やつくくええあんばいに噛めるようにやつこんだど。

一ガラ（茶ほうじ一つ）ずつやったど。鬼は噛むと固いなガリツと噛まさつてしまうど。んだもんだから、困っているうちに、父親はみな食ってしまったど。そしてこんど、

「いや、今日は何だか、おれ、歯悪くて、今日は駄目だから、また後で来つから後で、また何か考えてて呉ろ。そんどこまた競争すつから」

て、鬼帰ったど。そしてまた来たごんだど。そしてこんど、

「ほんだら、縄ない、今日はするが」

ていうたど。そして藁、父親なは、柔かく打っておいで、ないよくしておいたど。鬼の縄、あちこち打っておいで呉ったど。そうして一生懸命でなうじど、鬼夢中になつてなつてるうしろさ行つてはあ、そおつと鬼の縄切つて父親なさ、こ^う足すごんだずも。娘、うしろさ行つてな。そしてこんどその藁、鬼のどさも持つて来るど。そしてなつたのな、一ひろ、二ひろと、たごんで置くわけだな、環にして。そしてしまい、ない上げてから、たごんでみたら、父親の方多がつたど。そして、

「やっぱり、おら家のおどつつあには敵わねから、お前みたいな下手な人さは嫁が
んね」

て、娘にそういわつて、鬼もあきらめであつたけど。利巧な娘であつたけど。
むかしとーびん。

「集成 248 鬼と賭」

43 化けもの話

むかしあつたけど。

毎晩げ、おら家のあたりのような鎮守さまで、踊りみたいな音すつずも。で、
それからこんど、なににぎやかにしてるもんだべと思つて、そおつと行つてみた
ど。そうしたら、さまざまな者集ばつて踊つてたどこであつたど。

デツツクバツカ スツカツカ
ニヤオニヤオにコンコンコン

このことかまえて 鎌倉の

カンマン太郎に聞かせんな、はあ

デツツクバツカ スツカツカ

ニヤオニヤオにコンコンコン

このことかまえて 鎌倉の

カンマン太郎に聞かせんな

くりかえし、くりかえし、毎晩げ踊るごんだど。それから、そのカンマン太郎
じゃ、何のごんだべと思つて調べてみたれば、鎌倉になんぽか大きな犬いたなで
あつたど。それに聞かせられれば、おれたち、来て集ばつて踊ることもでないか
ら、聞かせたくない。それを文句にして獣たち呼び合つて楽しんでいたのであつ
たけど。むかしとーびん。

「集成
256 猿神退治」

44 化 物 寺

むかし、おら家^えのあたりのようなところに、古い寺があつたけど。そしてそこに来る和尚さま、くる和尚さま、喉をみんな食いちぎられて殺されつこんだじもの。

ある日、なんだか賢こそうな旅僧がその村に来て、その話きいて、

「よし、そんなではおれがその化物退治してやつから、おれどこをここのお寺の住職にしてくろ」

なんていったど。年寄りたちは、

「とても駄目だがら、やめろ」

ていうども、聞かないで、まずお寺さ泊めることにしたど。そしたら旅僧は大きなフクデ餅一つ呉^くつでけろて言うたど。どこの家にあつたが、やったじもの。

そして夜になって、旅僧は火を焚いで、そのフクデ餅をワタシに上げたたら、「こんばんは」なていいながら、一人の和尚さん現わったど。そして、

「おれども、当らせてくろ」

なんて入ってきたど。そしてさまさまの話を仕掛けっじもの。しまいに、

「おれと術くらべしないか」

なんていうたど。旅僧は、

「ほんだな、おれも、ちっと知ってだが、まずお前からやってみろ」

ていったど。

「あんまりええ、そんではまず大入道になって見せつか」

なんて、身なりを一ゆすりすつど、六尺にもなつたど。旅僧は「ほほう、それだけが」ていうど、「いや、まだまだだ」て、また一ゆすりて天井板まで届きそうになつたど。そうすつど、旅僧は上を見ないで、

「いや、これはおどろいだ。だが大きくなら、おれもなれるが、小さくは、ちいとむずかしいもんだが、なれつか」

ていうたど。そうしたら、そんなことは造作もないなんて、今度克蘭克蘭と、とつくり返り、三尺ばかりになつたど。旅僧は、「なんだそんなものか」てい

うど、また克蘭克蘭としたら、こんどは小さく小さく豆ぐらいになったど。そうすつど旅僧はやにわに握んで、フクデ餅の熱くやけた中に押し込んだら、キヤーツて逃げて行つたど。そうこうしてるうちに夜が明けて、村の人たちあ、旅の和尚さま、生きつだか死んだかなんて、ガヤガヤ来たごんだど。そして和尚さま、何ごともなかったが、なんて聞いたら、

「コロコロと転んだ」て語り、「あれはきつとミコシイタチだと思う。おれに熱いフクデ餅に入れられ、火傷しつたべから、何だか裏の方さ行つたようだから、行つてみんべ」

なんて、みんなで行つてみたら、やっぱり穴があり、その奥でウンウンうなつてる声すんの、唐鍬なんか持ち寄つて掘つてみたら、やっぱり毛も白がかった古ミコシであつたど。前の旅僧たちは大入道になったとき、見上げて喉を嚙みつかれ、血を吸い取られて死に死にしたのであつたべ。この旅僧は村の衆にうやまわれて、住職になつて安泰に暮したけど。むかしとーびん。

45 さとりのお化け

むかしあつたけど。

炭焼きおやじ、夜、山で退屈なもんだし、このような風に、ただいてももったいないと思って『カンジキ曲げ』しつたど。そして一生懸命曲げでだば、旅人あ来たずもな。「こんばんは」て来たなだ。

「こんな山の中さな、何だべまず。何かの化けたものには相違ないな」と、こう思つたど。

「ほう、なんだ親父、おれば何かに化げだんだと思つたべ」と、こういうずもの。

「いよいよもつて、これは化けたもんだ」

そう思つたど。

「いや、やつぱり、いよいよもつて、化けもんだと思つたな」

こういうずものな。そのうちに親父も恐つかなくなって来たもんだから、ちと

太めのカンジキ曲げつだな、手はずして、ピンと跳ねだずも。そうすつど、その旅人どこさ、太い方、とんで行って、その鼻柱のあたりピンとはじいてしまったど。そうしたば、キヤーツと逃げて行つたど、鼻血たらしたらし…。まあそうする気でないぐしたもんだから、悟れねえがつたそうだ。そうして夜明けてがら、「やれやれ、ええがつた」

と思つて、血たらしした後辿つてみたど。そして雪の上さポタポタと垂^たつてた血辿つて行つてみたら、穴あつたど。そして村の衆たのんで行つて掘つてみたば、古ぼけた猪^{むじな}であつたど。そうする気でなくしたもんだから、ふいに急所やらつで、うなつていたどこ、捕らつてしまつたけど。むかしとーびん。

46 化狸と和尚

むかしあつたけど。

むかし、ここのお寺で、くる和尚さまもくる和尚さまも、みんな何か化物に食つで、いねぐなつてしまふごんだど。あるとき、えらい旅僧が来て、

「そんでは、おれはこの寺さ、そなわつてみる」

で、こういうたど。村の年寄りに。そしたら、

「いやいや、どんな和尚さま来ても、みんな食つてしまつて、駄目ななだから、お前もそんなことしない方がええ」

で、こういうたど。

「ほだども、いやいや、おれば直なおらせでくろ」

で、そしてその寺さ入つたど。そして夜になつたど。一生懸命で火焚いで、こんな石を焙つておいだど。そしたらこんど、「今晚は」てきたど。旅僧がな。

「和尚さま、和尚さま。一晩げ泊めて呉れねえか」

「ああ、ええでどこでない。同業者だもの、どうか泊まれ、入ってだか、何も蒲団もないから、おれも来たばりで腹あぶりして、二人で夜明かすぜ」

ていうたど。そうして泊ったど。まず夕飯の分、すごして二人で腹焙りしたど。そうしてその寺さ泊めてもらった和尚さま、ねむかけはじめだど。そうすつど、利口な旅僧は火箸さ手かけて、ねむかけすつど、こう頭下げつど、泊めてもらった和尚さま、カエツポひろげて出したど。こう頭下げつどググツと包くんでしまうど、そうしてこんど、

「ああ、やつぱり、おれ思うとおりだな」

て、こう思つて、和尚さま、こんど深くねぶつたようにして頭下げつだど。そうすつど、こうひろげて和尚さまかぶせそうにしたど。そんで、来た和尚さま見えねえほどひろげてしまつたど。そんな時、火箸で焼いっだ石、ひよいとその中さ入つたど。そうすつどギヤーツというもんで、戸開けて逃げて行つてしまつたど。そして次の朝げになつたば、村の衆、

「和尚さま、和尚さま、いたが」て来たど。

「いたいた」「何にもなかったが」て、いうて来たど。

「本当の和尚さまだか、化物でないが」

ていうずもの。

「いやいや、本当の和尚さまだから。来たつけ、昨夜、化物、実はこれこれで逃げて行つたから、裏のあたりに孔あんべから、そさみんなで行つてみんな」て。

「まず、村にありつたけ、南蛮（唐辛子）あつめてこい」

て、そういうたど。そして村の人は南蛮干しつたの、ありだけ持つて来たど。

そして裏の沢の方さ行つて探してみたば、穴あつたど。その、この入口さ火焚いて、その南蛮をいぶしたど。そしてこつちから一生懸命でその孔さ扇ぎ込んだど。

そしたば「うん、うん」て、音してあつたど。これあ切ないもんだから、こんどカエツポさは焼け石入れられる。南蛮いぶしはされるし、して、切なくて切なくて這い出はつてきたど。そこをみんなで叩き殺さつたど。それからそこのお寺さ、何にも化物はあ、現われなくて、その和尚さまはえらい和尚さまですごしてあつたけど。むかしとーびん。

47 小倉の狐

むかしあつたけど。

むかし、小倉の峠さ狐いっぱい住んであつたど。そして狐ども相談したど。

「小倉の太郎兵衛の婆さ、臍へそねえじだから、それまず言つて、御馳走食う工面すつぜえ」

そうしてはあ、相談して、時のお役人に化けたど。狐ども、ほして「今日は」なて行つたど。

「こつちの家の婆さま、へそないちゅうごんだが、それ調べることになつて来た」て、こういうたど。

「ほんなどこ見せねねごんだら、切ないごんだ」
と思つてはあ、

「まず、お役人さま、寄つておぐやれ」
て、寄せではあ、

「何ごちそうしたらええんだが」

て、こういうたど。ほしたら、

「油揚げと油餅の方、ええ」

て、こういうずも。

「はあ、そんなことは雑作ねごつだから、ほんでは、御馳走すつから、まず寄つておぐやれ」

て、臍見らんね工面すんべと思つてはあ、食いだいていうもの拵えて御馳走したど。ほうしたば、狐どもなもんだから、腹いっぱい食つたずもの。臍のこと忘れではあ、帰つたずもの。

ほして、小倉峠さ帰つてきて、踊り出したど。

太郎兵衛のかかは

へそなしかがで

油揚げに

油餅

よっぱら すっぱら

まぐらった

てはあ、くりかえし、くりがえし踊ってやったけど。むかしとーびん。

「集成 278 狐の立聴」

48 孝行息子の藤六

むかしあつたけど。

父親と息子いで、その息子、藤六と名付いであつたど。んで、こんど父親が病気になって、寒のうちに寒のうちの鮎食だいの、たけのこ食だいのつていうござんだずもの。んで、

「蒲沢さでも行ったら、あるがしら、行つて見でくつからなあ」
て、出て行つたど。

そうして山の神に根雪浅いから、ここらにあつかと思つて掘つてみたば、見つけたど。まず、たけのこ掘つて、

「いや、まずええがった。これは、筍は手に入つたども、鮎はとられんべかなあ」
と思つて、蒲沢沼さ来てみたど。そうしたら氷張^{ざり}つていたずも。そうして、
「これは困つたなあ」

と思つて、まず、帯といて自分あ腹押えつけで温めたど。その氷なあ。ほうしたば何だかゆるんだようだと思つて、唐鍬で叩いたど。そうしてかましたば、鮎ひよつんと上がつて来たずもの。

「いや、ええがった。鮎も採れだし、帰んべ」
と思つて来たど。そうしたば、まだお日様あるつもりなな、暗くなつてしまつたずも。

「困つたごんなもんだ。だいたい、こつちの方角なようだけでも」
て、とぼとぼと来たば、向うに灯り見えつど。

「いや、こんなどこに家あつたけが」

そう思つて、まず松灯の一本ももらうかなあと思つて寄つたど。ほして、「こんばんは」ていうたば、年寄りの親父いでやつたど。ほして、

「まず、暗くなつて行かんねぐなつたから、あまりおしうしだども、松灯一本呉つておぐやんねが」

ていうたば、

「ええどこでねえぜ。んだども松灯呉れる代りに、おれ頼みも聞いて呉ろ」
こう言わつたど。

「ええ、あまりええ」

ていうたば、

「おれ、つれあい、まず昨日死んだども、この雪ではあ、おれ仕末さんねでいるどこだから、悪れども、雪の上、穴掘るもひどいし、お前持つて行つて川さ投げてくんねえか」

て、頼まつたど。ほして、

「困つたもの引受けたもんだ」

と思つたどもはあ、灯しもらねば来らんねもんだから、引受けて背負つたど。
重たいがったども、来て、ほしてあんばいええ崖あつから、こゝらで投げ下ろす
かと思つて、おろす氣になつたど。

「藤六、藤六、投げんべと思ふなよ」

て、こういうずも。ほうすつど仕方ないがら、いまつうと背負つてと思つて、
背負つて、こつちさ来た。またあんばいええどこあつから、おろすべと思うど、
また、

「藤六、藤六、投げんべと思ふなよ」

こう言うずも。仕方なくてはあ、つい家さ来てしまつたど。

「明日なつたら、誰も起きねうちに、前の川さ流すべ」

そう思つてはあ、庭土間さおろして、そうして入つたど。ほしたば、何、暗い
なでなく、まだ薄明りのあるうちであつたど。ほしてまず家さ入つて、

「おどつつあ、おどつつあ、鮎も筍も採つてきたぜ」

そうして食わせたど。喜んで、

「寒の鮓はやっぱりうまい」

なてはあ、喜んで食ったずもの。ほして次の朝げ、

「まず早いどこ、みんな起きねうちに背負って行かんね」

と思つて、庭さ行つてみたど。そうしたば、庭いっぱいさ金ひろがつていたつたど。

「いやいや、これは昨夜の、死骸、なくて、金ばりだ」

て、そういうたれば、父親は、

「お前、親孝行なさ、神さま授けて呉つたんだごで」

そう教えて呉つただけど。むかしとーびん、びつたりさんすけ。

49 大阪の蛙と京都の蛙

大阪にも京都にも、蛙いでだど。そして大阪の蛙は、

「何とかして、おれも京都いっぺん見たいもんだ」

て思つて出かけて行つたど。

ピタンピタンと出かけて、峠まで行つたど。

「いや、疲れた、疲れた。腰痛やめつから、一つ、立つて…」

て思つて、立つたど。蛙の目は天頂てんぎやうにあるもんだから、立つたもんで、うしろ見えたど。そうしたら、大てい京都見えるかと思つたのに、立つた拍子に後見えもんだから、大阪見えたど。

「なんだ、京都なんて大阪と同じや。こんなこんでは見ねえてええ」

その蛙はまたピタンピタンて、大阪さ歸つてしまつたど。

京都の蛙もそれと同じに山の上まで行つて、

「いやいや、こわいこわい。ここからでもええから、見つかない」

て、また立ったど。そうすつど京都見えてしまったど。

「いや、大阪も京都と同じや。こんでは見ねえ方ええ」

て、またそこから京都の蛙も戻ってしまつてあつたど。むかしとーびん。

「集成 308 京の蛙と大阪の蛙」

50 聾の挨拶

嫁の家さ行つて、何て挨拶したらええか分んねので、親が川向うで豆蒔きしてたなに、聞いたそうだ。

「嫁の家さ行ったら、何て挨拶したらええ」

そしたら、口上教えらつたずも。川へだだっているもんだから、聞えながつたど。

「なえだて？」

て聞き返したど。

「これほどうても、まだ分んねが」

て、ふくべんさ豆入れて蒔いてたのを、そのふくべん振って言うたど。そうすつど、家さ帰つて、ふくべんさ豆入つて持つて行つて、

「これほどうても、まだ分んねが」

て、嫁の家で挨拶したど。こげな馬鹿さ、とても娘呉れらんねと、嫁取上げらつたど。

「集成
336 A 聶の挨拶、栗蒔」

51 枯木見舞 — 南の山の兄んにや —

むかし、あつたけど。

南の山の兄んにや嫁もらつたど。ほして二人で正月礼に行ぐちゆうだど。そしたれば、家の衆、

「さあさあ、あの、向うの家さ行ったら、立派な焼き物あっちけがら、それ賞めろよ。南京焼火鉢だっけがな」

ていうから、

「こう、はんじえでみて、ええ音すんべがら、そんな時、そういうて賞めろ」
て教えらっで行ったど。そうしてはあ、行つて、

「結構なお正月でござる」

なて、まず挨拶したど。やっぱりその火鉢出であつたど。ほして、はんじえだら、チーンと音したど。

「いやいや、ええ火鉢だごと、これは南京焼だべか、唐焼だべが」
て、こういうたど。

「南京焼だ」て、はあ、その親父、たいへんに得意気だど。

「おやおや、この野郎、馬鹿だと聞いてたが、そんがえ思つたほど馬鹿でもねえぞ」

て思つて喜んだど。そのうち寒い日でもあつたもんだからはあ、じさま寝つた

なな、起きてきたど。

「いやいや、さむくてさむくて、ちいと腹あぶりすなね」

て起きてきて、立て膝して、もったもの出したど。吹きの寒い日なもんだから、
てろてろに光ってだど。ほうすつどその兄んにや、

「これも、はじぐなだべか」と思つて、

「南京焼だべか、唐焼だべか」

て、こう、はじいだずも。さあ、痛くていたどこ、はじがっだもんだから、じ
さま、「いたい、いたい」て、ちぢんでしまったどはあ。それみたば親父はごしや
えで、

「こげな聳さは、とても娘呉つておがんね」

て、取っぱがきつで、しおしおと家さ帰ったけど。むかしとーびん。

「集成
337 枯木見舞」

52 数 の 子 ― 南山のおじ ―

むかしあつたけど。

南の山のおじあ、正月札に嫁の家さ行つて、数の子出さつた。あんまりうまいから、手づかみして数の子食つたど。そうして小便たれ行つて、さわつたもんだから、かゆくなくなつたずもの。そしたば、かかに、

「かゆくなくなつて困つたもんだから、洗わねなあ」

て言わつたど。それで洗つてうるうちに、ふやけてしまつて、取れなくなつてしまつたずも。

「これは困つたことになつた。取れなくなつた」

朝げになつても取れねごんだずも。仕方ないから、ヤカンぶら下げて起きてきたど。そして飯ごちそうになつて後、親父、

「あまり退屈だから、将棋さしでもすつか、兄んにや」

ていうたど。そして、「あまりええ」て、さしてゐるうちに、何気なしに、

センキカエツポは抜けねどせ

て、さしたど。思わずな。そうすつど、じさま、

うらの清水で冷やせどせ

ていうたと、おしうど親父はさしたど。

「ははあ、それはとれつか」と、そう思つて、

「おどつつあま、おどつつあま、おれ、ちよつと用達して来つから」

そういうて、裏の方さ廻つて行つてみたば、冷ひやっこい清水あつたど。そさ、ま
ず、のだばつて冷したど。そしたば冷っこいもんだから、ちぢんでしまつて取れ
であつたど。んだから、そんな不精はするもんでないど。むかしとーびん。

「集成
357 塩辛と菓罐」

むかしあつたけど。

南の山のお嫁さんもらう年頃の兄いだっけど。ある人の仲人で遠^とつかいどつから、そしてとてもいい家から、兄にはもったいないほどのお嫁さんもらったけど。そして里帰りに行くことになったじもの。そしてはあ、二人で出かけたど。途中で行くど、嫁っこが、

「兄んにや、兄んにや、おら家さ行ったら、あまりやたらに喋んなよ」

ていつて、チンチンに糸縄つけて、

「おれが脇にいて、いい頃に引っぱから、そんな時、へきようでござる」と、こう言うように」

て、教えて連れて行つたごんだど。そしてまず、はじめはうまく挨拶もできたので、向うのおとうさんも、少しうすのろと聞いたが、これぐらいなら、まずよがんばると思つてだど。そのうちに嫁っこがオシッコ出たくなり、ちよいと立つ

て、まず糸縄を下駄に結つけて行つたんだ。その家に犬っこ飼つてであつた
じもの。その犬っこがそれを見ついで、じゃれだ。そうすつど兄は、

「さようでござり申す」

というども、何度も何度も引張られるので、しまいには、切なくなつて、

「さようの頭がもげそうでござる。さようの頭がもげそうでござる」

といいながら、何度も何度も頭をさげていたところに、嫁っこはもどつて、た
まげる、親父は怒つて、せつかくもらつた嫁は取っぱがさつで、しおしおとわが
家に帰つて行つたけど。むかしとーびん。

54 屁くらへ

むかし、丹後と備後に、屁たれるじさま、いであつた。そしてある時、
「屁たれくらべしてみねえか」

ていうたど、殿さまの前で。そうしたら、たったど。丹後のじさまは、

タンゴ タジマの

タンタコ タンタコ タン

て、たったど。

「それは上手だ、上手だ。備後、お前だぞ」

ビンゴ ビシマの

ビッビコ ビッビコ ビッ

てたったど。

殿さまは、どっちさも軍配上げようがったど。むかしとーびん。

「集成 513 屁の問答」

55 寝言兄弟

むかしあつたけど。

男の子どもばかり三人いて、毎晩同じ寝言語る兄弟であつたど。そして兄の方は、「そーそとござった」という寝言であつたど。それ、泥棒が知しやないでその家さ入って、一つ何か盗むべと思つて行つたど、軒場まで。そしたらちやうど寝言の始まる時分であつたど。そして兄始めたずもの。

「そーそとござった」

て。そうすつど泥棒は、「これは見つけらつたな」と思つてしやがんだど。と、二番目はこんど、

「しやがたまつてござった」

て、そうすつど、へいや、こんでは駄目だ。見つけらつてしまったと思つて、逃げ出したど。そしたら一番小さいのは、

「どこまで行つても、テンビン棒」

て、こういうたど。そうしてはあ、泥棒へいや、こんなおつかない家さ、二度ど来らんね」て、そう思つてはあ、来なくなつてあつたけど。むかしとーびん。

「集成 385 三人屁」

56 爺婆と黄粉

むかしあつたけど。

じさ、朝げ早く起きて、お庭掃いだど。大きな豆、ごろごろと転んだど。喜んで拾つたど。

「ばさ、ばさ、こんな大きな豆拾つたがら、まず半分はタネ、半分は豆の子（黄粉）にすつぜ」

ほうしてはあ、まずガラゴロと煎つて、はたいたども、あまり貧乏であつたべちやえ、篩持たねがつたど。

「はたいだも、まず篩ないし、隣の家さ行つて借りれば、みち子さんが舐めだいていうし、新しい家さ行けば、千代子は舐めだいていうし、いつそのこと、おれ禪、この間買ったばかりだし、禪のはしで、ほろぐが」

そういうたど。そして禪のはしでふるつたら、じさま屁出てきてはあ、大きな屁、ぶーんとたれだど。その豆のこは、みなふつとんで行つたど。

ほうして向い山の笹葉さくつついでしまつたど。ほうすつどはあ、近所の子どもは餅あぶつて持つて行つて、

じんじの屁の実は うまいな

じんじの屁の実は うまいな

て、つけて食つたけど。むかしとーびん。

「集成
388 爺婆と黄粉」

57 医者と鍛冶屋

むかしあつたけど。

お医者さんと鍛冶屋と一緒に死んだごんだど。そしてはあ、道づれになつて、三途の川や、あれを通り抜けて行つたど。そしてらこんど、エンマ大王さまに、「お前たちは生きてるうちに人さまのためにもなつたべども、金も大變にとつたもんだから、ただなど浄仏させらんね」

て、そしてこんど、あれだずもの。「檜の山さのぼれ」て、こう言わつたごんだずも。そしてら鍛冶屋、一晩げのうちに金のワラジ作つてしまつたど。そして、お医者さんと二人、金のワラジ拵えで、その檜の山のぼつたど。

「これは困つた人、これでは仕様ないがら、煮立湯でも入れる他ないな」

と、こう思つたど。それからこんど、釜さお湯わかつて、そさ入れることにしたど。そうすつど、ええお医者であつたべちやえ、体中塗つじど、火傷のしない薬拵えだごんだずも。そしてらさつぱり火傷もしないでケロッと入つていっずも。

いや、こんでは仕様ない。

「お前達は、やっぱり世の中さええことしたせいでそうなんだがら、淨仏させろはあ」

て、そう言わつであつたけど。むかしとーびん。

「集成 442 閻魔の失敗」

58 かくれみの

むかしあつたけど。ある村に、おじいさんとおばあさんと二人暮していたけど。そうしてこんど、おじいさんは山さ畑つくつてで、そこの草とりに行つたずも。そして、

「あんまり暑いから、休むかな」
て思つて、尻ついて、

「夕方にもなったし、休んで帰りましょう」

て思つて、休んでだら、何だか人の喋るような声すつずもな。よつく聞くど、何か洞穴にでもいたでないかと思うような感じすつけがら、ずうつと声する方さ行つたど。そうしたば木の洞（うち）つていうわな、朽ちて中穴になつていたどこさ、そこさ行つてみたば、天狗二人いたけど。そうして何しつたと思つて、そつと覗つて見たば、二人で踊りおどつていたど。

一とべ 二とべ

一とべ 二とべ

てはあ。二人ではね上がつて踊つていだつけど。はあ、面白そうで、じんつあ耐えらんねがら、「おれもはまつてみましよう」て、「一とべ、二とべ」て、入つて行つたずも。そうすつど天狗、喜こんで喜んで、三人で、

一とべ 二とべ

おれもはまつて 三とべ

て、しばらく踊つて、

「あまり上手だから、帰るときに駄賃に、かくれみの、呉れてやる」

て、ミノもらったど。そうして、よほどいたましい羽根だども、とばんねど悪^われから、

「この羽根つけてやっか」

て、羽根二本つけて、そのミノもらったど。そしてこんど、

「どがえだか、とんでみっか」

て、そのミノ着てるうちに、ぐうつと飛んで行ってしまったずも。そしてこんど、いま少しで家さ行きつくようになったども、とってもオシッコ出てはあ、堪えらんね。かくれみの着たまんま、オシッコしたずも。とんでで……。そうしたば、そのかくれみの、せっかく前合せったな、そこ孔あいでしたど。村の人は、「何だ。あれだけとんで行く」て見たど。そしてそだけ出して家さ帰ったれば、婆さ、そこだけ歩いてるのを見て、たまげだど。

「ばさ、ばさ、いまちいとで家さ帰る頃になったば、オシッコ堪えらんねで、小便たっで、かくれみのさ孔あいでしまつて、あんばいよく飛ばんねけがら、ここ

わずか歩いて来たども、天狗さまに「こういうものもらって来た」

て、そうして大事にしまっていたど。

したば、そして次の日になったば、天狗、

「じんつあ、じんつあ、何としまった」

て、来たども。して、

「昨日はええミノもらって、とんで来たども、家さ、いまちいと来るときはあ、オシッコ堪えらんねで、途中でとんだまましたら、肝心などこ孔あいで、チンチン出はるようになった」

ていうたど。そしてこんど、

「んだら、これ貼ってくれっから、おらいたどころさ来い。ミノ着てこい」

ていわつで、それ修繕してもらって、またそのミノ着て、その洞穴さ行ったけど。そしてまた、

一とべ 二とべ

おれもはまって 三とべ

てはあ、たのしくおどつて、そしてこんどは大丈夫にしてもらつて、そのかくれみの着て、家さ帰つたど。ほしたれば、ばんちやは大喜びしたずも。むかしとーびん。(高橋しのぶ氏と補いあつて語つたもの)

「集成 468 隠れ蓑笠」

59 夫婦と鏡

むかしあつたけど。

ある殿さまが〈触れ〉廻して、「灰で縄なつたものには、何でも好きな御褒美くれる」て、そういうお触れ廻したど。そしたら、その息子が工夫して縄なつて一把に束ねたままで、火点けて焼いて、そくつとそのまま持つて行つたど。殿さまの前さ、そしたら殿さま、

「よく出来た」て。

「では、お前の好きなもの、何でも呉れっから、言ってみろ」

て、こう言わっただど。

「おれあ、何も欲しくないども、死んだ父親に会いたい」

て、こう言わっただど。そしたら殿さま、

「ええどこでない。会わせてくれっから」

その当時、殿さまでもないば、鏡なていうもの持たねがっただど。そしてその鏡を呉れたど。そして箱に入っただど丸い、こう持つ鏡であっただど。そして、

「もう二、三年経ってからでないば、ふた取んなよ」

て、こう言うて教えただど。そしてそれを固く守ってはあ、三年すぎてから、その箱のふたとってみただど。そしたば、自分の顔は鏡に写っただど。そしたら父親によく似た顔であつたと見えて、父親だずもの。

「ああ、ええがった。親に会えた。殿さまのおかげで。こりや大事にしまっておいて、ときどき会わんなね」

て、またふたしてはあ、大事にしまっておいたど。そしたら、かが、こんど、

「おら家の親父、どうも座敷の方さ行つて、ニコツと来ると。何、まず、しまつておいたもんだ」

て、不思議に思つたど。そしてこんど親父のいないうちに探したど。あっちこっち。そしたらその丸いもの見つかつたずも。それからふたとつてみたど。したらば、なんぼかええ女いたずもの。

「おやじ、おれに隠して、こんなええ女しまつていた」

こんどは怒つてしまつてはあ、それば、かが、ぶんぶんでいたど。親父帰つてきたど。

「このおやじ、今まで人ばだまして、あんなええ女かくして、毎日会つていだなであつたな」て、大喧嘩になつたど。

「そんな女、かくしておくはずあつか」て。

「いや、ある」て、二人でゆずり合わねずもの。

「ほんだら、歩いて見ろ」

て、そのかがは親父ば引張つて行つたど、座敷さ。そして箱とつて、

「ほら見ろ、こんなええ女しまつて置いて」

て、こういうたど。親父あ、

「それなど、おら家のおどつつあだ」

て、こういうど。そして顔と顔寄せてみたば、二人写つてしまつたど。それではじめで、これは写るもの、子は親に似るもんだなと、二人で悟つて、仲よく暮してあつたど。むかしとーびん。

「集成 319 尼裁判」

60 歌 くらべ ― 和尚と小僧 ―

むかし、加賀の法輪寺というお寺あつたど。その小僧さんに太郎と次郎と三郎というの居て、太郎というのは武士の子で、次郎は百姓の子、三郎は和尚の子であつたど。

ある日、おりんという女がボタモチ売りに来た。

「お前だ、＼りん＼という字のついた歌詠めば、ボタモチ買ってやる」
ていうた。そしたば、武士の子は、

りんりんと、小反^そりにそった小薙刀

ひとふり振れば 敵はちりりん
て詠んだ。

「ほう上手出た。なに餅ええ」

「あずき餅、ええ」て、買ってもらった。

「今度、お前の番だ」て、百姓の子に言った。

りんりんと、小反りにそった春いわし

なめして食ったら 腹がとちりん

て詠んだ。

「おお、よく出来た。お前は何ええ」

「きなこ餅、ええ」て。

こんど最後の和尚さんの子の番になった。

りんりんと リンゴの花を手を持ちて

詣るお寺は 加賀の法輪寺

て、こう詠んだ。

「上手だ。お前は何ええ」

「ごま餅、ええ」

て、買ってもらって食った。むかしとーびん。

「集成

500

りんの歌」

61 か い 餅

むかしあつたけど。

お寺の和尚さんと小僧がいであつたど。和尚さんが、かい餅練りして食うども、和尚さん、自分でばかり食って、小僧に食べさせない。あるとき、和尚さんが

御法事に招ばって行つた後で、小僧が一人で作って食べたど。あまり作りすぎして、食べ残したど。そこで、入口の雪の中さ鍋のまま埋めたど。そして忘れつど思つて、ギンギンと踏んで、その上さ糞たつておいた。

次の朝に見ると、雪降つて見えなくなつてしまつた。小僧は道踏みに出て、

雪降りて　しるしの糞も見えざれば

かい餅なべは　いずくなるらん

て掘つていた。それを和尚さん聞きつけて、

「小僧、いま何ていうた」

「雪降りて、しるしの松も見えざれば、わが故里はいずくなるらん」

て言つた。

「よくできた。そんではかい餅のことは許す」

て、和尚さんいうた。

「集成
360
標の石」

62 まんじゅう

和尚さま、法事さ出て行つた後、常にくれないまんじゅうを小僧が食つた。そして和尚さま来るまでに何としたらええかと考えていたども、考えつかねうちに和尚さま歸つたども、

「本尊さまさ上げておいたおまんじゅう、なして聞かないで食べた」

「おれでない、本尊様たべた」ていうて、

「本尊様は金仏だから」

「ほだて、おれ食ねから、本尊様だ。ほだら、食つたか食ねか、叩いてみつか」て、叩いてみたば、カーンというど。

「ほう、食ねていうど」

和尚さま、こういうたど。

「ほんだら、火あぶりにしてみたらええでねえか」
ていうたど。火にあぶつたども、音立てね。

「ほんでは、和尚さま、水さ入っで見たらええでねえか」

水さ入っでみたば、金仏焼いたもんだから、クッタクッタというたど。和尚さまは小僧に負けやったど。

「集成 539 餅は本尊様」

63 食われた餅

むかしあつたけど。

和尚さんと小僧二人いでやったど。そして和尚さん、餅、他所からもらつて来たど。

「こりや小僧にくれっど、おれ腹いっぱい食んねもの、土尾の方に何か見せもの来たずから、そこさやつて、それから、おれ焙つて食うべ」

て、そう思つて、

「小僧、小僧、にさだ二人ではあ、今日、土尾さ遊びに行つてこい。暇くれつか

ら」

て、出してやったど。と、小僧だちも餅もらったこと知ってたもんだから、

「こりや、和尚さま、おら居ね後に食う氣であんめえか」

そう思ったど。そしてまず、そこらまで行つて、ちいと油売つて、和尚さま焙り出したような頃、戻ってきたど。そして下相談したずもの。

「お前、先に声かけろ。おれ、この節孔から和尚さま、どさ隠すか見てつから」
こう相談して、そして節孔から一人の小僧はのぞこんでいたど。ちがいない。

和尚さま、焙っていたそうだ。ワタシさ。そうすつど一人の小僧、

「和尚さま、和尚さま、今来た」て、廊下で声かけた。

「いや、早く来らつた」と思つて、和尚さま氣いもんで、囲炉裏の灰ほげで、そさ、みなフクレ餅埋めてしまつたど。そしてそれ、節孔から見つた小僧、こんど廊下さ行つて、

「こういう風にしたわ」

て、教えたと、別な小僧に。そして二人で入つて行つたど。

「ひどい早く来たな。にさだ、どんなこと見て来たや」て。

「面白くないけがら来たはあ、和尚さま」

「ほんだら、どんなもんだけ」

そうすつど、小僧たち二人で火箸つかんだずも。

「こんなこと、したけなあ」

て、囲炉裏つついたら、みな餅、火箸さ刺さつて来てしまつたど。そうして小僧たちにみな食わつであつたど。ほだから、食い意地などしないで、小僧にも分けて食せれば、和尚さまも食つてあつたども、みな小僧に食^かつであつたけど。むかしとーびん。

「集成 533 焼餅和尚」

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいだども、子ども持たねがつたど。そして何とかして子ども欲しいと思つて、鎮守さまさ日参したど。

「どうか、ええ息子さずけて呉^くろ」

て。そしてばんちや産んでしまつたども、肝心なもの喰付いでいねがつたど。

「じさま、こりや困つたごんだ。これ無いでは仕様ない」

て思つて、また鎮守さまお詣りに行つて、

「大抵、八寸ぐらいにええがんべ」

て、こう思つたども、間違つて、

「八十尋あるように。八十尋あるように」

て拝んだど。そうしたばぐんぐん伸びて、長くて長くて仕様ないほど長くなつてしまつたど。んだども、仕方ないもんだから、直してくろなて頼まんねしと思つ

て育てたど。そして大きくなつたども、そんなものさ嫁の来とうもない。

「仕方ないがら、お前、世の中広いから、歩つてみる。もしや嫁もあつかもしれないから」

て、出したど。そしてその辺で藁で編んだな「カツコダワラ」さ、八十尋つめ込んで、肩さかつねで出かけたど。そうしてずつと旅して行くども、なかなかそんな嫁はないくて、大阪の方まで行つたど。そして行って、ええお天氣の日に、松の木の下き昼休みしつたど。そしてカツコダワラを脇さおいで、昼休みしつた。そのうちに温かくポカポカちゅうもんだかが、カツコダワラからひよろひよると出はつてきて、そうして松の木、ひよろひよると昇つて行つたど。そして天狗さまの鼻見つけで、似たようなもんだと思つて、プクツと突ついだど。天狗さま、たまげてしまつて、

「おれより長い鼻、いるもんだ」

て思つて、その拍子に打出の小槌落して逃げて行つたど。天狗さまは、そうすつど下さ落ちできたなで、目覚めだつて。そうしてこんど見たば、見なれぬ小槌あ

るし、

「これは昔から聞いてる打出の小槌だに、相違ない」

て、そう思つて、

「よしよし、一つ試してみんべ」

「この長いもの、短くなつかなんだか」

て、そして、丁度ええくらいの寸法言つたど。そうしたら丁度よくなつたど。

「いや、これはええがった。これだとお嫁さんもあんべ。んだども、まずおれは何も知しやねもんだから、勉強しなね」

て、そう思つて、大阪の鴻池という家さ行つて、番頭に働かせてもらつたど。

そうしてこんど、一生懸命かげひなたなく働くもんだからはあ、主人の氣に入らつて、そしてその娘の躰になつてもらいたいと、こゝう言わつて、大阪の鴻池といへば、音に聞えた旦那衆であつたつて。そしてその躰になつて、こんど、

「実はこういう親、国元にいたから、」

て、話して、呼び寄せて親孝行してあつたど。むかしとーびん。

65 栃の実の化けもの

むかしあつたけど。となりの父ちゃんみたいに、牛の好きな人、肥出しこいししたずも。そしたら前川の方で、「トテー、トテー」て音すつど。何だべと思つて、肥出しカギかつたまま行つてみたど。そしたば蚊が栃の実、目玉さ入つてはあ、取らんねくて、「トテー、トテー」て泣いっただつたど。ど、とうちゃんが肥出しカギで、栃の実、ぐいっと取つて呉つたど。そしたら、蚊が、

カンブンデル

カン カーン

と、飛んで行つたけど。むかしとーびん。

「集成
640 短かい話」

66 人柱の話

むかしあつたけど。

むかしは今とちがつて、百姓衆は水に困つど、堤というものの拵えだもんだど。あるところに大きな堤こさうべと思つたども、土手つくど崩れ、つくどはあ、崩れするごんだずもな。

「これは何か人柱でも立てなければ、駄目なのだと、おれ、人柱立てることにすつだい」

て、その名主さまは、こういうたど。

「そんでは、まず、誰ば立ててええていうもんでないから、今日来つた人の着物のうちで、横継ぎにつがつていた人は、人柱にすつから」

て、名主さま、そういうたど。そうしてみんなの着物しらべだど。タツケやら、そしたば名主さまの袴さ、横つぎがつてたど。自分が言い出したもんだから、仕方なくて、名主さまがその堤の人柱になつて、そしてはあ、無事にその堤もで

き上がってあったど。んだから、男の着物さは、横継ぎはつぐもんでないど。むかしとーびん。

「集成 662 長良の人柱」

67 マイタケ採り

むかしあったけど。

あるところにじさとばさいだっけど。隣りにもいだっけど。秋のお天氣のよい日、じさ、マイタケ採りにいったら、いっぱい出でたども、ちっとちっちゃがったど。家さ来て、ばさに、

「ばさ、ばさ。今日はマイタケとりに、どこそこさ行つたば、まだちいとちっちゃがった。明後日あたりになつど、丁度ええぐなる」

て、大きい声で教えだのを、隣のばさ、外で聞いて、家さ帰って、

「じさ、じさ、隣のじさ、こういうてだけ」

と教えたら、隣のじさ、明後日でなく、明日採りに行って来て、そろっと並べて、眺めでだど。そんなこと知らないじさが、明後日になったので、行ってみたら、一株も残ってなかったので、がっかりして帰ってくる時、隣を見たら、いっぱいマイタケあったど。

「おやおや、こんがえいっぱい、マイタケ、どっから採ってきたのや」と聞いたど。そしたら、隣のじさ、すました顔して、

「うん、明後日から採ってきた」といったけど。とーぴん。

68 股 大 根

お大黒さまという人は、何ぼか餅の好きな人であつたずも。そしてあるとき、

招ばれて行って、あんまり餅食ったもんだから、腹切せつなくてはあ、うんうんうなつて寝てだごんだど。そうしたば大根売りのおつか、通りかかったど。

「おいおい、おい、大根一本ゆずって呉ろ」

て、寝てて、叫さなったど。

「いやいや、今日のなは、注文でとてもゆずらんね
ていうたど。

「そう言わねで、おれあ、あんまり餅、昨日食つて、切なくてとても起きらんねどこだから、どうか一本呉つておぐやい」

て、こいうたど。んだども、見てたけざあ、

「いやいや、二股大根あるから、そうせば本数は何本と約束してきたなだから、呉れらんねども、この二股大根さいで、ほんだら呉つて行くがら」

て、二股大根さいで、食つて、その大黒さまが大変よくなつて治つてあつたど。

命拾いひしたど。んだから、大黒さまは二股大根、そのために子供こどもえするもんだけど。むかしとーびん。

69 八月 赤子

むかしあつたけど。

お腹大きくなつて、八月にもなつて、いまにも生みそうになつて出掛けたもんだから、山の中まで行ったら、腹、急に病めてきて、炭小屋のような小屋見つけて、うんうんと、腹痛めてうなつていたど。そしたら侍通りかかつて、

「近頃買った、新身あらみの一刀で、試切りしてみる」

て、そしてはあ、その苦しんでいるそのおつかさんば、その新身の刀で切つたつてなだ。そうすつど中まで切れないで、腹の皮まで切れて、そうしてその人は、
「おお、切れる切れる」

なて、行つてしまつたど。そうすつど、その傷口から赤子が顔出して、オギヤオギヤ泣いてだど。

それ、むかし、ワラジ履きで道中したもんだど。砥屋藤左エ門という人が通りががたつたど。なんだもんだか、小屋の中の赤子の泣き声するから入つてみたら、

女の人のお腹切られて、その傷口から赤子が出て、オギャオギャ泣いてたど。

「かわいそうに、まず、親は何とも仕様ないから、子どもだけ育ててやんべ」

て、そう思つて、その男の手で子ども取り上げたような形にして、つれて行つたど。家さ。そして「お捨て」と名付けて、こんど育てておいて、よっぽど大きくなつたから、

「お前はこうした素性の子どもだ」

ていうこと教えたど。そうして、

「おれは刀の砥師だから、いずれその刀持った侍、来るかも知れない」

て、こう言うて教えて育てて来たど。ほしたら段々と大きくなつて、

「憎い親の仇をとつてくんなね」

て、その子はそう思つてたど。そしたらある時、やつぱり相当の年配になつた侍が、刀砥ぎ頼みに来たちゆうなだもの。そしたら、少し刃こぼれあつたどな。

刀に。そしたら来る人毎に、藤左エ門という人は調べるために、その刀はどうしたわけで、ここに傷付いたことの、どうのこうのと話しながら、砥ぎ砥ぎしてだ

なだけど。したら、その侍言うには、

「この刃こぼれは、昔、山道通りかかって、炭小屋のようなどで、大きな腹したかが、腹痛みしてたのを、初めて買ったとき、試切りした時の刃こぼれ、今だに残っていんなだ。できだば、これも取るように砥いでもらいたい」

て、こういうたど。それ、陰の部屋で聞いてだ子どものお捨ては、今にも飛びかかんべと思つたども、藤左エ門に目くばせさつて、まずやめで置いだど。そしてその刀砥いで、こんどあんまり切れなく砥いで呉つたわけだ。次の日になつて役人さ届けて、そして藤左エ門がすけだちして、親の仇とらせて呉つてやつたけど。むかしとーびん。

70 田の草取り

むかしあつたけど。

越後に大百姓いでやつたど。そしてこんど、大百姓なもんだから、田も大きな田ばかり持ってであつたど。若衆もいっぱい置く、そしてはあ、秋になつど、どうもその田の真中ごろええぐないもんだずも。それから、その旦那、あるとき田の草取んねで、ぐるりばかり取ってだなであつたど。

「いや、これでは困った」

と。そう思つてある日、こんど五升樽背負つて行つたど。そしてこんど、田の真中さ五升樽おいて来たこんだど。そして若衆上がつて来たど。

「にさだ、どこそこの大田、田の草取つたが」

て、こう聞いたど。

「取つたぜ、旦那さま」
て、こういうずもの。

「何か変わったことなかったか」

て聞いたずも。

「何もなかったな」ていうずも。

「ほだらええし。明日、いまいっぺん、その田の草取ってみねが」
て、こういうたど。若衆あ、

「異いなこという。おらだ真中取んねがったこと悟らつだがな」
と思つて、

「今日は仕方ないから、まず真中まで取つか」

て、みんなで取つて行つたど。そしたら五升樽一本立ててあつたど。そうして
こんどは田の草取つて、夕方、それ持つて来たど。

「いや、旦那さま、申しわけなかった。実は真中の田の草とんねでだであつた。
今日は取つたば、五升樽あつた」

て、そういうど。

「それ、お前だ、真中まで丁寧にとつた御褒美に、おれ置いたなだから、お前だ、

今夜飲め」

て、そう言わつて、若衆喜んで飲む。それから若衆も改心して、仕事は粗末にしないようになって、ますます大百姓になってあつたけど。むかしとーびん。

71 酒田の本間さま（1）

むかしから、あんな大旦那さまでながつたのだど。朝げ早く起きて川杭拾いに行つたごんだど。そうしたところが、何か川杭さ引つかかつていだものあつずもの。なんだべと思つて、杭さ引つかかつていたものあるし、見たらば、縞の財布のようなものだずもの。それから拾い上げてみたらば、ずつしり重たいなたもの。そうして開けてみたらば、お金いっぱい入っていたずもの。これは何者落したか、流したか知しやねえと思つて、時の代官所さ届けたごんだど。そして落した、無くしたという者、近所にいねがつたずもの。そして、

「お前は、朝起き、の、授かりもんだから、お前にやる。落し主ないから」
て、もらったために、その百両の金で、ほうぼうの荒れた田地を起すやら、買
い集めるやらして、酒田の本間さまは、あれだけの身代になったなだど。どーび
ん。

72 酒田の本間さま（2）

むかしあつたど。

酒田の本間さまは、自分の持ち田を廻るに一週間もかかることであつたど。て
くてく、小作やら何やら見廻りに歩くに、あるとき、廻って行つて茶屋で休んで
いたど。そしたば西行袋みたいな、肩さかついだ人も来て、休んだごんだずも。
そして、「どこまで行く」て聞いたど。そしたば、

「おれは石屋で、旅歩つていんなだ」

て、こういうたど。

「ほんでは、おれは、石垣ちいと直したいどこあるから、あの、おら家さ行つて呉ろ、おれあ今日、二日くらい帰んねがら」

て、そういうずもの。

「まず、休んでろ」て。そういわつて、袋さげて行つたもんだど。そしてこんど玄關さ行つて、

「おれは、こつちの旦那の友だちだから」

なてはあ、大きなこと言うて、入つて行つたど。そういうもんだからはあ、

「大事な金、いっぱい入つたなだから、大事にしまつておけ」

石屋なもんだから、金には相違ないごでな。この番頭衆はしまつたけど。その袋。そしてこんどは、

「金持つていっど、これ泥棒でも恐つかなくて、こんな仕度して歩^あるっているなだべ、この旦那さまは……」

と、こう思つたど。そして座敷さ上げて、

「まず、何ごちそうしたらええべ、旦那さま」

「おれは江戸から来たなだ。湯豆腐でもしてこい」

湯豆腐なて、その酒田のあたりで知しやねがつたど。そうして据風呂さ豆腐切つて入つで、沸かしたごんだど。そして、

「さあ、まず湯豆腐出たから、入つておくらえ」ていう。

「何語つていんなだ。湯豆腐さあ、鍋で煮て、醤油つけて、酒の肴に食うもんだ」て教えたど。

「いやいや、おれあまた湯豆腐なていう、風呂の中さ入れるもんだかと思つて、風呂いっぱい豆腐入れておいた」

て、そういうずも。そして寝て、職人なんだし、朝げ早く起きだど。したば、そこの番頭さんも早く起きて、一番々頭が、

「お客さま、お目覚めですか」て、座敷の外でいうずもの。

「ああ、目覚めっただぜ」ていうど。

「今、米、港についた。いっぱいお買いになりませんか」

て、こういうたど。

「なんだ。この旦那さま、米の一杯ばり買えなて、米の一杯ばり買わねば食んねなだべか」

こう思つたど。

「一杯でも二杯でも買つておけ」

て、こういうたど。そうしたば、番頭のいうのは舟一杯であつたのだど。それ知しやねで、「二杯でも二杯でも買つておけ」て、こういうたごんだど。そういうもんだから、番頭は二杯買ったごんだど。そうしてよつぽど経もよつたら、

「旦那さま、なんだか値ええから、売つたらどういうもんだ」

て、夕方になつたらいうずも。

「ええようにしろ」

て、こういうたど。そしたらその番頭は売つたつて。こんど、お金、盆さ山のよように積んで、

「お客さまの利益は、これだけであつた」

て、持つて来たど。さあたまげてしまつたずものな。それからこんど、馬鹿でもなかつた人だごでな。なんぼ石屋でも、へはあ、船一杯であつた」と悟つたずも。

そうすれば、「小遣いにしろ」なて、わしづかみにして、ちいと呉つて、

「さあ、これは旦那の来ないうちに逃げんなねもんだ」

と、こう思つて、それにぎつてはあ、氣付かんねうちに逃げねねと思つて、番頭に、

「ちよつと用達しに行つてくるから、御主人帰つたら、よろしく言うて行つたつて、こういうて呉ろ」

その金あ、こんど風呂敷借りて包んではあ、逃げてしまつたど。そして近江国というところまで逃げて行つて、酒屋を始めたもんだど。そしてトントン拍子に仕事もうまく行つて、こんど立派な身成りして、酒田の、あのとのおかげだとお札に行つて来ねねもんだと、ステッキなどついで来たごんだど。

「旦那さま、おれ、あのとときの石屋だ。泊つて、これこれであつて、お金もうけてもらつて、それを資本にして、おれは近江で、今で酒屋して、近江の酒屋つて

いえば、おれだ」

て、こういう札いうたど。

「よく来てくつだ」

て、その晩げ泊めたど。そして朝げ、暇乞いして帰んべと思つたど。そうしたば、上り台さ、西行袋、ちゃんと出してで呉つたど。

「これがあの時の、あなたの忘れもんだ」

て、本間さまの御主人に言われたど。したらこんど、

「ああ、わるがつた、おごり長じ掛かつてであつた」と氣いついたわけだ。

「ありがたくださいて帰る」

て、そしてその人は、袋、立派な服装の上さかつねて帰つたど。そして一生、その袋を教訓として、身代なくさないで、ますます旦那さまになつてあつたけど。むかしとーびん。

73 百子沢

百子沢というどこに、むかし、なんぼか旦那さまで、与惣左エ門という家あつたけど。そしてはあ、さまざま立派な道具ばり持つていっども、その家でも南京焼の皿、十。なんぼか大切にしまつていで、珍らしいえらいお客さま来たときばり使つてだんだど。

それ、こんど遠くの方から、立派な珍らしいお客来たから、その皿出してきて、今夜使つて、そして何御馳走したんだか、その皿使つて、そしてお賄いして、奥さまは休んだじし、後仕まいに、お花という氣立てのやさしい娘来て、手伝つていたなはあ、なじよなか、手はずして、一つこわしてしまつたけど。そしてお花はそれ、こんど氣の毒がつて、拾とおそろつてたのな、こんど買いかえて、こんな皿は買わんね。ここの家の宝皿、おれ割つてしまつて申しわけない。何として申しわけしたらええんだかと思うども、ええこと考えらんねではあ、その家になんぼか大きな深い池、上手にあつたなだど。そこさ沈んで死んでしまつたなだど。そ

んで、晩げ、

「一つ、二つ、三つ、四つ…八つ、九つ」

て勘定して、一つ足んねもんだから、「一つ、二つ…ええーん」と泣く声すつずもの、毎晩げ、毎晩げ。それ長く続いたど。

そしたばそのうちに、何だかその池はだんだん育おがつて、沼になってしまつてはあ、その家建つていらんねぐなつて、そしてはあ、その家は引越してしまつたじし、そしてこんどは、その沼はおがるばりだど。沼にはさまざま名前あつて、柄杓ずれの沼なても、なんぼか山の奥にある風だし、その「お花」の死んだ沢は、百子沢でも一番大きな沼になつて、そしていっぱい沼あるせい、か、「百子沢」ていうど。

74 おりや峠

むかしあつたけど。

むかし越後にお里乃という娘がいて、その家で、蛇漬けて、そして、「三年経たねば食うな」て、カメさ味噌漬にしておいっだつて。こんど少しずつ食べさせただ。あまりうまいもんで、家の人のいない後に、その味噌漬少しずつ食べ食べて、カメ一つ全部食ってしまっただ。

こんど喉乾いで、かわいで、とても汲んで飲んだんでは足なくて、入り水の桶にかぶついて、そして水飲んでも、それでも足りなくて、手前の川さ行つて、川さ入つて水飲んだだ。そしてるうちに大蛇になつてしまっただ。そして川にいらんねために、大里の山に入り込んだだ。そしてその山を七回り半巻いたとき、一人の坊さんがその山道通りかがつただ。そして夜になつても、盲目なもんだから、越すべと思つただも、とても途中まで行ったら疲れたし、さびしさも来て、道側さ腰かけて三味線ひいて唄うたつただ。そしてその蛇というものは

唄がなんぼか好きで、そしてまず、坊さんのことだから、ええ女かわるい女か分らねども、まずええ女がでてきたそうだ。

「坊さま、坊さま、おれ唄が好きなんだから、いま一つその唄きかせてくろ」
て、坊さまがまたその唄聞かせたそうだ。そしたば、

「坊さんが誰にも言わないごんだら、おれも素性をいう」て、

「おれは、実はこういうわけで大蛇になってしまつて、この山、七巻き半まいたども、十二巻きまけば、関八ヶ谷、水の海にしたいと思つてゐる。んだども、おれの体には一番わるいのは、鉄だ」

こういうたど。

「だが、人に話せば、あなたはすぐ死んでしまうぞ」

て、そういうたど。その坊さまは誰にも言わねごとにして降つたど。そして下関しもの関三左エ門さまという大地主さまさ泊めてもらつたど。

血相かえて、その坊さま、そして、

「村の衆を集めてくろ。おれ話終れば死ぬべから、片付けてもらわんなねし、聞

いてもらわんなね」

そして、こういう蛇が七巻き半まいてるそうだから、十二巻まけば、関八ヶ谷海にするからというから、どうか早く退治してくろ。ていうたつて。言い終つど坊さまはすぐグンと死んでしまつたど。そして、その坊さま祀るために、座頭の宮というお宮建てて、今でも杖も笠もあるそうだ。そして、

「蛇の体には鉄の錆が一番毒だ。そういうごんだ。それから栗の木、栗の渋も毒だというごんだから、それらを持つて行つて、打ち込んだらええべ」

て、こゝう教えて死んだそうだ。そして村人たちがみんなで杭を作つて、山さ行つてみたば、一樽もあるようなの、巻いでであつたど。そして、てんでんに杭を打つたそうだ、その蛇さ。そしてその蛇が七日七夜苦しんだつて。そしてこんど尻尾落して、パチャンパチャンていわせて、その地名が太内渕、そういう風に今でも地名あるど。そして関八ヶ谷、助^{たす}かてあつたど。そんで恩返しに、今でも祀られつでるど。むかしとーびん。

75 手の子の久兄

むかし、手の子の方に久兄という人がいであつたど。

その久が宇津峠の堀川となつたような道を、大きな臼を背負つて、歩いて行く
と、向うから、馬車馬方がやってきて、久を見ると、

「久兄、よけろ、よけろ」

といったど。すると久は、道路の真中にどすんと臼をあろすが、やにわに、崖
をはいのぼつて行つて、あぐらかいで下を見ただ。馬車ひきは困つて、

「久兄、なんだ。こんなところに臼おろして」

ていったら、久は、

「ほだたて、久よけろと言つたがら、臼よけろと言わながつたべ」

やつて、にやにやしたつけど。

またある時は、手の子の旦那さまに雇わつてた時に、一日働いて夕方上がつて
来たら、

「久や、茄子植えてくれや」

といわれ、「ハイ」といって、裏の畑に植えたど。翌朝、旦那さま、水くれんべ
と思つて行つてみたら、みんなサカサに植えてたど。旦那、たまげて、

「なんだ、久、さかさでないか」

といったら、

「そんであつたがなあ、とにかく暗くてわかんねがつた」

といったけど。

76 慶次之介と玉川太郎

慶次之介は下滝部落の丸山という山の中ほどに、岩の洞穴に住んでいて、山で
も川でも上手であつたというので、今でも部落の人々は山の神のように信仰をし
て、旧二月十七日にお祭りをして、そこへお詣りに行く。けれど、出っぱってい

るので、風当りがつよく、雪が積らず、とても岩穴は誰一人見た方がないそうです。その下でお詣りして帰る。年々そうなそうです。そして部落の言い伝えには金の茶釜があるというんだそうです。

玉川太郎との喧嘩は、太郎が玉川の川に簾やなのような仕掛けで、真中を水を通して、そこにドウていう、細い木で編んで丸くしたものをつけ、魚をとる。それを作っておいたから、慶次之介がそつと魚とつて逃げようとしているところを太郎が見つけ、怒って追いかけては、石を投げつけ、投げつけた。慶次之介はぶつつけられては大変と、かけてかけて、下滝のところを、五アゴにかけて、次の山を駆けずって、これは「駆けずり山」という。そして岩屋に逃げ込んだ。今でも岩穴の下に山菜とりに行くとカランカランと音することもあるという。

77 一休和尚（1）

むかしあつたけど。

ふざけたところのある和尚さんで、一休和尚さんという和尚さんいであつたけど。
お正月にな、門松立てたり、めでたいなしてつどき、シャレコーべ、棒の先さ突っ
かけて江戸の町のなか、

正月は冥途の旅の一里塚

めでたくもあり　めでたくもなし

なんて、大声で歩きするような、すねた和尚さんであつたけど。むかしとーび
ん。

78 一休和尚（2）

むかしあつたけど。

都に紫の大徳寺というお寺があり、そこに賢い和尚さんで一休さんという和尚さんいだっけど。その和尚さんと大変仲よしのお侍で、お上の罪人の首切り役だった久米の平内という強いお侍がいだっけど。

ある日、雪の降る日、お寺へ遊びにきて、いろいろ話の末、和尚さんが、

「平内や、お前も大抵にして、首切りなど止めてはどうか。そうでないど、お前に嫌われた人のうらみが掛かるぞ」

て言っただ。そうしたら、平内は、

「おれは何も悪くない。お上をうらむがよい。お上の命令でやってるんだから、うらむなら、お上をうらむがよい」

と言っただ。和尚さんは、

「ああ、そうか、そうか」

て、さからわず縁側に立たれ、

「平内や、あまり竹に雪が掛つて重そうだから、落してくれないか」

て頼んだど。平内は「はい」と気易く立つて庭に出て、竹の雪をはらったど。

そしたら竹はピンとはね上がる時、平内の体に雪がばさつと掛ったど。そしたら和尚さんが、「どうだ平内、命令したのは、おれだが、雪をはらったのはお前だ。そのお前に雪が掛かったでないか」と言われて、はじめて平内も悟り、お弟子さんになり、自分が首切った人々の冥福を祈り、一生を送ったけど。むかしとーびん。

79 田の神団子

いそがしいので、田の神団子上げていらんねくて、稲を上げて、荷背負いに行つたつて。したらば、ピチャピチャ、ピチャピチャと、後から足音がした。

「んが子、火さくべて呉^くった」

そういわつてあつた。そうして見たところが何もない。そして家さ歸つてみたば、子ども火さくばつて火傷していたど。んだから何忘つても、田の神団子だけは忘れんなよつて教えらつた。

80 酒 吞 童 子 — 瞽女口説 —

酒吞童子は今こそ鬼　むかしの變化^{へんげ}の世にあるときは、イタコシカ村の権助の総領、親にならの養子にくれて、吉田長野でわが師匠寺に、稚児にやりたや十六才、おとこ美男と浮名を立てて、世間世情の女郎姫たちに、遊び来いとの恋文もらう、文の来ること万灯^{まんどう}の如く、笠の続くことメドリ葉（二枚々々の葉）の如く、和尚きびしよで見ることならぬ、今日は日もよい天気もよいし、和尚の留守の間に文干ししようと、カワゴツヅラの蓋とれば、人の思^{ひと}いは恐ろしもので、顔へか

かりて、ガエンとなりて、角は生え、たし、金齒は生えて、ところ鎮守に、ここに居るなど追い立てられて、ここにいられず弥彦の山に、弥彦大明神に追い立てられて、ここにいられず大江の山に、丹波大山は鬼の住む山で、鬼を集めて家来と名付けて、世間世情の女郎姫たちをさうて来、血をしぼりて酒と名付けて、肉を刻んで肴と名付け、これを天下に聞えたならば、一に頼光、二に渡辺の綱、三に貞光、四に宝生、五に金時、六季武、あれら六人おえない手合い、腰にホラ、の貝、手に数珠さげて、知らぬ山道、ちどりたどり登りくる、ヤーレ。

81 石 堂 丸

むかしあつたけど。

むかし、加藤左エ門資氏という人あ、侍はどうも人を殺したり、出世や何かでいろいろのことで、嫌やんだくなつたど。

「おれは世を捨てて和尚さまになりたい」と、こう思つてはあ、妻や子に教えていれば止められると、そう思つたもんだから、誰にも教えねではあ、そのまま高野山に登つてしまつたど。そして刈萱と名前変えて、和尚さまになつてあつたど。

それを風の便りに奥方聞いで、石堂丸という子どもつれて、旅かさねで探して行つたど。そして高野山の麓近くまで行つたども、慣れない旅なもんだから、母親は体こわして病氣になつたごんだど。そうして、どうやら宿屋さも泊らんね、路銀もなくなつたども、親切な家あつて、そこさ泊めてもらつたど。そして、

「ここから先、高野山は女人禁制で、とても、治つても登らんね」

て教えらつたごんだど。んで、石堂丸あ、

「おっかさ、おれ行つて見てくつから、それまでに元氣になつてろよ」

て、そう言つて、石堂丸はとぼとぼと一人で登つて行つたど。高野山さ。そうして登つて行つたら、なんぼもお寺もあり、和尚さん方もいるごんだずも。んだども、一人の和尚さんを、袖おさえて、

「近頃、和尚さまになつた人で、刈萱という和尚さま、知つてござんねが」

と聞いたごんだ。『今、同心の方で……』と、こゝういうたど。

「昨日剃った今同心、一昨日剃った今同心、そんなこと言うたて、分るもんでないぜ」

て、こゝう言うごんだ。

「いや、わたしの父親は加藤左エ門資氏という名前の人であつたども、御存知なれば教えてもらいたい」

て、そう言うたど。そしたらその和尚さま、しばらく考えてであつたども、

「そんなような和尚さまだつたら、最近逝くなつたであんまいか」

「逝くなられたようだら、その墓でもええから、会わせてもらいたい」

て、石堂丸はそう言うたど。そうしたら、お墓さつれでつて、また石塔も建たないお墓さつれで行つたど。

「これ、その方のお墓だと思ふから、よつくだ拝んで帰つて、とてもあれなんだから、お母さんと家さ帰つて、お母さんに孝行して暮した方がええ、そう思う」
て、さとして、そうして帰したど。石堂丸は泣き泣き帰つたど。とぼとぼな。

そしてその刈萱も涙を袖で拭いでであつたどな。そしてどうも本当だか嘘だつたがていうような、疑問も持ったども、石堂丸は戻つたど。そして戻つてみたら母親は死んでであつたずも。そしてはあ、泊つてた家も親切な家なんだからはあ、ねんごろに葬つて呉つてであつたど。そしてその墓の土を一握り持^たつて、また父にも会えず、母に死なれ、とてもおれも生きていらんねと、おれも和尚さまになんなねと、そう思つて、石堂丸もまた高野山さ再び登つて行つたど。そうしてこんど、その前教えてもらった和尚さまを探すと思つて、一生懸命で寺廻つてその和尚さまを探し当てたど。そして、

「和尚さん、和尚さん、里さ出て降つてみたら、おつかさんが、とうに死んでであつた。仕方ないから、土一握り持つて来たから、あの墓の傍さ埋めて、おれを弟子にして呉んねが」

て、そう言わつたど。そしたら、こんど、「あまりええ」て、そこさ、やつぱり埋めて、自分の弟子みたいなことにお寺さ願つて、小僧にして、ともども和尚さんになつてあつたど。そしてはあ、後では親子の名のりはしたそうだども、それ

まで悟りを開くまでは、他身で暮して、過してあったけど。むかしとーびん。

82 阿波の徳島十郎兵衛

むかし、阿波の国に、阿波の徳島十郎兵衛という人いだっけど。何かの罪で、国におられず、一人娘のおつるという、かわいい女の子も母親に頼み、遠い国の山奥で狩りをしたり、旅人をおそいお金を盗ったりして暮しっただけど。

阿波の国では、おつるも十二歳ばかりになって、ばばちゃんに、

「おれのおどつつあんやおつかさんは、なじよになつたなやあ」

て、毎日聞くもんだから、三人でお前をばばのおれにあずけて出て行つたが、風の便りに生きてるらしいから、お前探しに行つてみつかつて言つたど。そして笈摺おいずるという巡礼の着る着物に笠とに、同行二人と書いて、それは、一人にお大師さまの陰たのみななだど。それを着て笠をかむり、鈴を持ち、ばばちゃんに聞いた

親の年格好の人を探し探して、ある山小屋のような家に來たど。そして巡礼にご報謝ねがいますという、自分のところに描いた年格好のおつかあが出てきて、

「おやまあ、こんな年端もいかぬ子が、かわいそうに」

と思ひ、国はどこで、名は何というか、また親の名は……などと、「わが子もちようど……」このぐらいになつたべなあと思ふもんだから、やさしくして、腰かけて休め、何か食べろの、といったげんど、おつるもうれしくなり、

「はい、国は阿波で徳島の、父様は十郎兵衛、母親はおゆみと申します。その父様、母様にお会いしたくて、こうして探して歩くのです」というたど。その時のおゆみの驚きはもう少しで、その母はこのおれだと口まで出かかったが、親父どのは泥棒にまでなりさがっていることを、どうしてもこんなかわいい娘に聞かせられないと、心に思ひ、つい涙をぼろぼろこぼしたど。それを見ておつるは、そんなに泣いてくれつどこ見つど、もしや母様でございませんかと聞いたど。おゆみはあわてて涙を拭いて、

「いやいや、お前のおつかさまではないが、あまりかわいそうなので、つい涙が

出てしょうがない」と、立つて行き、お金たくさん持つてきて、「これをご報酬しますから、早く麓の村にさがり、そしてばさまの待つ阿波に帰った方がよいと思う。お前の、そんなに会いたがってることを、親たちがどこかで聞いて、お家に帰ってるかもしれないから」と。親ではないかと泣くおつるを、早く親父の帰らぬうちにと、なだめすかして送り出してやったけど。運わるく、まだ村に出ないうちに、あまり獲物もなくてく帰る十郎兵衛に行き会ってしまった。そして何もいわず絞め殺し、ありだけの金をとって家に来て、自慢話にした。いや、おゆみは驚いたり悲しんだりで今日の話を話して聞かせ、それは娘のおつるだといわれて、十郎兵衛もいままでもおゆみに泥棒だけはやめてくれと、たびたび言わっただが、なかなか止められなかった。自分の子を殺し、ようやく悪い目が覚め、頭丸めて娘や今までの人々をとらった。むかしとーびん。

83 岩見重太郎

むかしあるどこさ、鎮守さまがその当時の娘ば人身御供に取るどこあったど。

そしてその家に白羽の矢立つど、どうでも上げんねねがったごんだど。箱さ入れではあ。そさ、むかし、偉い強い侍で岩見重太郎という人で、その村通りかがって、庄屋さんさ泊ったど。そうしたば、「泊めて下さい」というたば、

「今夜はとりこみだども、まずどこがさ、ほだら部屋もあんべがら、泊まれ」

「どんなとりこみだ」て聞いたば、

「実は鎮守さまさ家の娘、このたび人身御供に上げんねねことになつてはあ、それ当ったごんだ。今までも村の内に代り代りに上げらったんだども、この度はうちののが、白羽の矢立ったごんだ、おら家の屋根に」

て、こう言うごんだど。泣いて教えつずも。

「鎮守さまともあろうものが、そんなはずない。そんでは、おれ代りに箱さ入って行ってみるがら、娘でなく、おれば入れる」

て、そう言うたずも。そうして箱さ綿帽子かぶつてはあ、娘の仕度して、入つて行つたごんだど。そうして行つて箱置くど村の若衆はびんびんと跳ねて来たど。そしていつでも、いま来つか、いま来つか、なじよなものの来つかと思つて中で考えつだじもの。刀は短かいな持つて。その内に今度、雷など鳴つて、何かドサツと社の前さ落ちたど。そうしてにいるうちに、その箱の蓋、みりみりと破つて開けるものあつたずもの。夜目にもわかるような赤い顔した白いような者だずもの。そうすつどその喉のようなどこ目がけて手掛けようとしたどこを突き上げたごんだど。そうすつどキャーッという声だずもの。そして箱から飛び上がつて、あちこち突つついたど。そしてまず箱さ入つて、かつねで来らつだから、方角も夜のことだし、よく分んねから、夜明けてからすんべと、そう思つてにいるうちに、夜ほのぼのと明けたか、村の衆、遠くから「いたか、お侍、いたか」て来たずも。「いた、いた」て。そうしたば、みんな集つた。よつく見たば年経た^へ緋々であつたど。そうしてはあ、そういう風にして娘ば食つてだなであつたど。村の衆に大変喜ばつでだけど。むかしとーびん。

84 義経と弁慶

むかしあつたけど、義経と弁慶、戦いくさのとき、ある山の上で陣取っていたとき、「何だか、弁慶、トロロ食いたい」なて、こういうたど。

「谷間さ降りたら山の芋掘られんべから、おれ作つて来るわ」て、へご主人のござものゝて、弁慶おりて行つたど。義経、

「あんなこと言うて、弁慶は芋は掘られつかもしんねえども、なじよにして播るもんだべ」て、そう思つて、山の上さあがつて、弁慶は見たど。そしたれば谷間さ行つてみて、山の芋あ見つけて掘つたど。やつぱりそのうちに昔の弁当、それさ、弁慶、山の芋きれいに洗つて、ガリガリと嚙かんでは、ほろぎ出し、ガリガリと嚙かんではホロギ出しすつどな。そしてこんどは、ええ加減溜どつた時、味噌入つて、ガエロガエロかましてはあ、持つて来たど。

「いや、ひどいもの、これは食せられるもんだ」て、義経、そう思つたどなあ。

「弁慶、世の中で何一番汚ないと思う」て、こういうたど。弁慶は利巧な人であつ

たどな。「人のすること見ないふりして見てる人が一番汚ない」て、そう答えたど。
仕方なくって、義経は弁慶の嘯み出したトロロ食つてあつたけど。むかしとーび
ん。

85 鬼神のお松

むかしあつたけど。

笠松峠つて、けわしい峠あつたけど。そうしてそこに鬼神のお松て名付けらつ
だ泥棒いだっけど。そして、通る人、通る人もみんなそれに殺さつてはあ、そこ
さ行つた人で帰つた人はめつたにながつたど。

そしてある日、夏目弾正白三郎という人通りかかつて来たば、川端さ倒れたき
れいな女いたずもの。そして、

「ああ、腹痛める、腹痛める」て、苦しんでいるもんだから、

「そがえに腹痛めるでは、こんなどこにいらんねがら、医者でも行くとか、向う

の宿場さ渡る他ないから、おれに背負^ぶされ」

て、そして背負^ぶつて大井川を背負^ぶつて、真中ごろまで来つどはあ、その脇差抜いではあ、白三郎ば殺してしまつたずも。そして自分はまた元のように逃げて、その名前は

一里のぼれば不動が滝 二里のぼれば十二が屋形

三里のぼれば人も通らぬ 岩屋の屏風

ていう、けわしいどこさ逃げて行つたど。家では一週間もよつても帰つて来ないなて心配しつたけど。そしてこんど、いるうちに権助と三助と二人で雑魚釣りに行つたずも。そしてずっと川渚歩いて行つて、釣してゐるうちに、何だか薄黒いもの、大きな石さ引つ掛つていたと思つたば、なんだか白三郎という人死んだという話聞いた、それでもないんだか、とにかくお上さ届けてみねえかて、その死体ばお上さ届けてみたば、やつぱりその死骸であつたそうだ。そうしてこんど、それを拾い上げて息子は夏目仙太郎という人であつたけど。それ、こんどまた仇討ちたいまんまに、けわしいどこさ行つて、岩のぼつて一里のぼれば不動滝、二

里のぼれば十二が屋形、三里のぼって行つて、人も通らぬ岩屋の屏風、それ通り抜けてまた行つてみたば、やつぱり川端にきれいな女、どこわるいんだか苦しんで寝っだそうだ。

「どこ悪い」ていうたば、「今日、何もはあ、足は病める、腹はやめる、この川渡りしたいと思つたども、とても渡らんね」て、また、

「それは嘘だ。にせものだ。名を名のつてやる。この前、おれの父の夏目弾正白三郎ていうのば打つたの、貴様にちがないから、尋常に勝負しろ」

て、そういうたど。そしてこんど、鬼神のお松も短刀もつて、一生懸命たたがつたども、とても仙太郎には敵わない。めでたく仇とつて家さ帰つたど。むかしとーびん。

86 紫式部の唄よみ

むかしあつたけど。むかし宮中で歌の会ときどきあつたど。ある時、紫式部という方が、なんぼか上手歌よんだど。そしたら朋輩衆に、

「お前の母親は歌の名人だもの、これは母親に聞いた歌だべ」
て、そう言わっただど。紫式部は残念で、あの係の方が自分の前通るとき、袖をおさえて、唄よんだど。

大江山　いく野のみちの遠ければ

また文をみず　天の橋立

て、おかあさんが遠いとこにいでやって、そこでそんな見る余裕はなかったつて。そういう歌であつたど。むかしとーびん。

87 菅 原 道 真

むかし、菅原道真公に、親は伯大夫という人に、三人の男兄弟いでやったつて。梅王丸に松王丸に桜丸。それが今度、梅王丸は道真公がどこかへ流されるとき、自分の身の危険をさとつたもんだか、自分の身隠してしまつたもんだど。そのとき、松王丸はこう詠んだど。桜丸は腹切つて死んだのだど。

梅はとび、桜は枯るる世の中に、何とて松のつれなかるらん

て、そう唄よんで、自分も腹切つて、死ぬなだども、その前に道真公の子ども、自分の子ども身代りにするなであつたど。寺小屋さ上げるとき、松王丸の奥方は、「一字千金、二千金、三千世界の宝の里、教える人に習う子ら」

て、そう言つて、寺小屋さ、わが子上げであつたど。そしてこんど道真公の子どもおさえて、殺されるといふことになつた時に、その子どもを隠して、わが子を道真公の身代りにして首にして差出したど。そしてこんど、我が子もそういう風にしたもんだから、松王丸も辞世の唄のこして自分も死んであつたけど。

88 御詠歌の昔話（1）

二十一番 丹波国菩提山穴太寺

かかるよにうまれあうみのあなうやと

おもわでたのめ とこえひとこえ

むかしむかし、丹波国に仲のわるい姑と嫁といであつたど。ろくに口もきかないほどであつたど。こんど嫁が、子ども生れるようになって、いよいよ生む日になつて、なんぼか難産であつたど。あまりのつらさに、常日頃も忘れて、思わず、

「おかあさん、苦しい」

と叫んだど。それで不仲もとけて、それから仲よくなつたど。

89 御詠歌の昔話（2）

七番大和国東光山岡寺

けさみれば つゆおかでらのにわのこけ

さながらるりのひかりなりけり

むかし、大和国に「おか」という女ごが居て、ある旦那さまで、女中をしていて、時々乞食が来ると、旦那のものはあつても、自分がくわせてもらう分のおまんまをめぐんでやり、その時のために水尻に袋を下げて置き、さまざまなのが溜るので、それを夜になると鍋に入れてぐつぐつ煮て食つたど。

それを旦那さまが見て、夜になって誰もいない時、人にかくれて何かうまいもの食つてんべ、よし、今夜は見てくれんべと、また煮ている頃起きて行つて、やにわに蓋とつてみたり、何が何やらわかんないものを煮てたのであつたど。そんな人であつたので、死んでから、岡寺に祀られたど。

90 てんぽ物語

天保元年やかんの年に

近江の湖に火がついて

じんじぼんぼと燃えたれば

座頭が見つけで オツチが火事ぶれ

足なし走り 手なしもみ消した

そのときのいでたちは

六尺の棒をたすきにかけ

三尺手拭杖につき

豆腐の足駄に青竹すげて

生畦わたって みみずのとげ

ぶんぬくとまで刺したり

91 果なし話

むかしあつたけど。向いの山から、大きな蛇頭出したど。今日もノロノロ、明日もノロノロ、あさつてもノロノロ、やなさつてもノロノロ、毎日ノロノロ、ノロノロ。その蛇は出はつて来たど。

92 ねずみ経

むかしあつたけど。ある時旅人が山の方へさしかかったら日暮れとなり、
「これは困ったもんだ。どこか泊れそうなどこないかなあ」

と見おろしたら、下の方にぽっかり灯りが見えるので、そこへ行つて、

「今晚は。道に迷つてしまい、灯りをたよつてきたどこだか、今晚一晚泊めてもらえないか」

といったれば、年とったおばあさんがいて、「ああ、いいどこでない」と、泊めてご馳走してくっだど。その旅人はどんなつもりか、和尚さまの姿してであつたど。それでおばあさんは、

「和尚さま、和尚さま、おら家の仏さまは久しくお経上げてもらわないから、どうかお経を一つ上げておくんなさい」

といわれ、旅人は困つたど。上げないわけにも行かずに、仏壇の前に坐つて、まず手を合せて、お仏さまを見たら、リントウというものが下がつたど。

リントウ、リントウ、トウリントウ

ローソク立てか、花立てか

といつてゐるうちに、ねずみがちよろちよろ出てきたど。「ほおん、ちよろちよろの穴のぞき」と言つてゐるうちに、夫婦が出てきたもんで、またちよろちよろと穴のぞきと言つてた時、泥棒が二人で、さつき、ここの家さ泊つた和尚さん、お金でもたんまり持つてゐるかなどと言いながら、交代交代にのぞいたのだつたど。そして和尚さまが、

あなのぞき、何やらそうだん申されそうろう

後へひっこみそうろう

というので、これは見つかったぞと逃げて行つたけど。そんな事は知らないおばあさんは脇に坐てて、「いや、ありがたい、ありがたい」と喜んで、翌朝またご馳走たくさんして、ありがとうございましたといったけど。三楷松の下で狐コがこんこんこん。

93 まま子いじめ

むかし、あるどこに、おっかさんが子ども一人残して死んだどき、後家おっかもらったら、そのおっかあにも子どもができたら、自分の子ばり可愛がつて、親父が稼ぎに行つた後、いじめでばりいるもんであつたどき。

ある日、薬屋さんが来たどき。その薬屋は時々来て、小さい旗や紙てまりを呉れるので、子どもたちは待つてで薬屋が見えると、駆け出して、旗、紙てまりを

もらつて、追っかけ廻つたものだったどさ。

その後家おつかあの家さ行つたら、前のおつかあの子ども出てこながつたので、その子の名前を呼んだら、どこか座敷の方で、「ハイ、ウ…」というような声がするので、日頃から、ここの家のことを知つたので、思わず入りこみ、座敷に行つて見て、何だか長持の中のように、あけて見てびっくりぎょうてんしたどさ。

娘は沢山の蛇と一緒にいれられて、今にも死にそうになつてだどさ。薬屋出してやり、噛まれたところに薬をつけて、手当してやつてるところに、おつかあがどこからか現われる。叔父さんは仕事から帰つて来るして、大さわぎとなつたどさ。でも命なくなりそうなどを助かり、親父は喜ぶ、おつかさんもザンゲして真人間になつたけどさ。三楷松の下で狐がこんこんこん。

あとがき

川崎みさをを媼との出会いは昭和四十一年の夏だから、ざっと十三年前になる。民俗学者奥村幸雄氏にさそわれて、津川地区の民俗を調査するお助けをしようというほどのことで出かけたのであった。同地区の市野々の加藤家に寄り、夏の日ざかりを市野々から叶水まで歩いたことが思い出される。西滝部落の高橋きみのさんの宅に泊めてもらって、一晚に二十話ほどの話をきき、次の日は大石沢の高橋しのぶ媼に出会って一晚泊めてもらい、隣家の川崎さんも話に入ってくれて、二泊三日の調査で、三十数話の昔話を聞いた。ふりかえってみると、奥村先生の目的が、小生の昔話にとられてしまったようで面映い調査でもあった。

その後、何度か、奥村先生に同行してやら、小生が勝手にお聞きに参上した。川崎さんと高橋しのぶさんはいつも語りの座で一緒になって下さったから、本来はお二人の昔話であるが、ともかく川崎さんが直接語って下さったもの及び、折々にお手紙に書いて下さったものは、その時々にはばらばらに発表してきたことも

あつて、『お杉お玉』『さとりのお化け』『鬼と豆のくいくら』『行けざんざん』の四冊の、小生の〈小国町昔話集〉の他にも『山形の民話』その他に分散してあるので、機会を見てまとめようと考えていたのであつた。ようやくその機会を得て、ガリ版にすることができた。

一、二付言すれば、川崎さんは幼少の頃に子守りに奉公したことがあり、もっぱら大人の世界に子どもの頃から接触したこと、天性の記憶力で保存してきたこと、何ごとにも努力でそれを克服しようという人柄などが加味され、その上、隣の高橋さんと共に楽しんで語りを語るといったことが、百話をこす昔話の伝承者となつた理由のように思われる。中でも最後の二話は、たまたま湯治中に新潟の渡辺一子さんから聞いたものを小生宛に書き送って下さつたものであり、御詠歌の昔話を含む数話はこれまた自ら書き送って下さつたものである。全くありがたいことといわねばならない。

この十年の間、川崎さんのところには児童文学者の大川悦生さんはじめ、小河内芳子さん、俳優の山口崇さんなどをはじめ、NHKやらYBCなども番組に出

演を依頼されたし、山形県芸術祭文学祭にも参加してもらったりもした。小国町へもしばしば引き出されるということをお聞きするが、まさにそれにふさわしい昔話の話者であることは当然であるが、その上、自らも文化遺産の大切さを自覚なさつて、少しでも多くの人に語り聞かせようとなさるのは、本当にうれしいことである。小生は昔話だけでなく、どれだけ多くの人生を語ることを学んだか知れない。

この集は川崎さんの昔話を集めたものであるが、先に書いたように、高橋しづさんとの共著でもあり、高橋さんの語ったものは川崎さんが知っていても、語らないで残っているの、今後はそういうものもお聞きして、まとめたいと思っている。

昭和五十四年一月

武田 正

川崎みさをさんの昔話

昭和五十四年一月十五日 発行

編者 武 田 正

南陽市三間通二三二の三

川崎みさをさんの昔話 補遺

1 牛方と山姥

むかしあったけど。

ある時、越後の方がら魚屋が、いっぱい魚を仕入れて、山道にかかったら、お日さまが暮れそうになったど。そうしたら、うしろの方がら、

「魚いっぴき呉れる、魚いっぴき呉れる」

と、追っかけて来るものあつじもの。魚屋は恐つかなくて、うしろ見らんなくて、魚だけ一匹、うしろへ投げでやって、ぐんぐんと歩いたど。じきに追っかがつて、また、

「魚いっぴき呉れる、魚一匹呉れる」

というど。こんどは二、三匹つかんで投げでやって、またぐんぐんと走ったけども、またじきに追っかがつて、また魚一匹くれろというずも。こんでは性がない

からど思つて、背負つてだ籠ごと置いて逃げて行つたら、ぼつこれかげんの家あつたので、そこさ入つて、ツシさ上がつて隠つてだど。

よっぽど経もよつてがら、

「ああ寒い、寒い。魚はいっぱい食つたが、寒いがら、甘酒でも温めて飲むが」
なんて、鍋をかけ、まず温まるまで、背中あぶりでもしつかど、横になつたど。

それをツシから見てた魚屋は、屋根の芋おのがら殻を抜いで、つうつうと、みんな吸い上げてしまつたど。そしたら、鬼婆は目をさまして、

「どれ、温つたまつたが」

なんて言いながら起きたら、鍋はからになつたので、

「おやおや、眠つてるうちに、火の神さまが上がやったが。しかたない。こんどは餅でも焙つて食うが」

なんて一人言いいながら、餅をもつてきて焙り、

「焙れるまで、一眠入り」

なんて、またごろつと寝たど。そうしつど、また魚屋は焙つた頃、芋殻で餅を

じぐつと刺して、引っぱり上げては食い、引っぱり上げては食い、みな食ってしまつたど。

鬼婆は目をさまして、

「どれ、焙つたがな」

なんて起ぎでみだら、餅、さっぱりながつたど。

「おやおや、また火の神さまが上がやった。仕方ないがら、寢床にしか。石の唐戸にしたらしいが、木の唐戸にしたらしいが、今夜は寒いがら、木の唐戸にしんべ」

なんて、木の唐戸に入つて寝たど。それを見て、魚屋はツシがらそろつと降りできて、火をどんどん焚き、大きな鍋をみつけでお湯を沸かして、唐戸に鍵をかけ、キリで、きりきり、孔をあけだら、中で鬼婆は、

「今夜は寒いせいか、裏のキリキリ鳥が鳴くな」

なんていつてゐるうちに、その孔がら、熱つついお湯を、じょんじょん入れてやつたど。

「ああ、熱い、熱い、助けてくれ、助けてくれ」

と言いながら死んでしまった。魚屋に仇とらつただけ。むかしとーぴん、さんすけびったり釜の蓋、灰でみがけばよい銀玉、なあ、さんすけふんはい。

2 お杉 お玉

むかしあつたけど。

あるところに、おつかあに死なれ、お杉という女の子一人もったおどつつあいであつた。世話する人がいて、新しいおつかあもらつた。そしたら、そのおつかあにも女の子が生れた。そして名前は「お玉」と付けた。

おつかあはお玉ばりめんごがつては、お杉ばいじめつじもの。ある時、おどつつあが出かせぎに行つて来つから、子どもたち頼んだぞといつて、子ども好きの親父は出て行つた。

留守のあいだに、おつかあは何とが、お杉を片付けてしまふべど遠とおがい山さ置いて来るごどを考えで、誰かに見つかつどわるいがら、箱さでも入れて行くべど思つて、大きな箱出したど。それをお玉が見で、

「おつか、おつか、何しんなやど聞いだど。おつかあは、めんごいめんごいお玉なもんだから、

「これさ、姉さば入れで、山さ置いてくんнад。そうせば、お前にだけうまいもの、いっぱい食せられっこだい」

と言つたど。それを聞いだお玉は、たまげで、これは大變だ。何とかして助けたいど考え、姉おもいのお玉は、ケシの種を姉ちやさ持たせで、

「おつかあが、姉を箱に入れで、背負つて山さ置きに行んから、その箱にちっちゃい孔あけで置いだがら、その孔がら、この種をこぼし、こぼし行げよ。そしたら後で、おれ、それを見、見行つて、助けっから」

ていうたど。そしてお杉はおつかあに、箱さむりやりつめらつではあ、背負つて行がつて、山さ置いて来らつたど。

次の日、お玉はおつかあが仕事に出て行つた隙に、にぎり飯いっばい拵えではあ、けしの実をさがしさがし行つたら、ふしぎなことに、山に掛つたら、けしがおえで、花まであつちこつちに咲いでいだけど。これはやさしいお玉のこころを神さまがあわれんだなごだい。そして奥山まで行つたら、箱あつたど。その箱ぼつこして、姉ちやば出して、

「姉ちや、姉ちや、腹へつたべや、早く飯食え」て、飯食わせで、姉ちや、家さ行けば、またおつかにいじめられつから、二人で逃げんべて相談してはあ、町の方さ行つて、大きな家見つけで、そごでつかつてもらつてだど。

家では暗くなつてもお玉が見えないので、おつかあ心配してだどさ、おどつつあ帰つて来て、「お杉とお玉が見えないがどこさ行つた」て、かかに聞いたたら、

「二人で、どこさ行つたが、わがんない」

なんて、とぼけたごと言つたら、子ども見だくて、早く帰つたほどの、子ども好きなおどつつあは、泣ぎ泣ぎ、そこらこころ探したども、近所隣りにはいないけど。おどつつあはあんまり泣いで、目見えなくなつてしまったので、鉦を叩き

ながら、

お杉とお玉がいたならば

なんでこの鉦叩こばや

ちんからかん

と叩きながら、遠がい町の方まで行つたど。そしたら大きな家でやどわつて一生懸命稼いでだけようだ家の前まで来たど。

「お杉とお玉がいたならば、なんでこの鉦叩こばやー」ど、悲しげな声を、姉妹も聞きつけて、出はつてみだら、自分たちのおどつつあだったので、二人は双方からおどつつあどたぐりついだど。そしたらおどつつあは魂消て、ひょうしに見えるなかつた目がぼかつと明いだど。おどつつあは喜んで、二人の娘をつれで家さ歸つたど。おつかあも悪がつたど謝つては、仲よく暮したど。むかしとーびん。

3 親 棄 山

むかしあつたけど。あるところで、親を六十一になつど山さ置いて来たもんだ。ある孝行息子も、母親が六十一になつたので、山さ置いて来なんぐなつて、「おつか、おつか、切ないごんだが、置いて来ないば、殿さまにおんつあれつから、おつかあ、明日山さ行がなんないなあ」

なんて、いっぱいうまいもの食わせで、次の日はおつかあば背負^{おぶ}つて出かけたど。そして山路になつて、道もなぐなつたど。遠がい遠がい山さ置いて来^くんなだど、藪^こ漕いで行つたら、おつかあは、背負^ぶさつてで、柴^{しば}ぼきりぼきり折^おんなだど。息子は、「こんなことして、戻^{かへ}ってくるつもりだべか」なんて考えで、大きな木のあつどこまで行つては、そこさ降ろして、

「おつかあ、悪いどもなあ」

なんて、泣き泣き帰^{かへ}んべど思つたら、おつかあは、

「兄にや、兄にや、帰^{かへ}るどこ分^わないど思つて、柴^{しば}、折^おしより折^おしより来^きたがら、

それ見で、迷わねよに、行げよ」

て、言わつたので、息子は、「こんなありがたい親、とても置いて行がんね」て背負つて帰り、縁の下に孔掘つて隠しておいたど。

そのうちに、殿さまがお触れを出したど。「誰でも、灰で縄を一把なつた者には、何でもいいもの呉れる」ど。そしたら息子はおつかあにそつと相談したど。

「おつかあ、灰で縄なんて、なじよにしたらなわれんべ」
て。そしたら、おつかあは、

「縄なつて、そくつと焼けばいいごで」て教えだど。そして息子は作つて、殿さまさ差し出したば、殿さまは「いや、賢こい、賢こい」て、なんぼか賞めで、
「何でも望みのほうびくれるから、申してみろ」どいったど。息子は、

「山さ拾てるおつかあ、欲しい」て言つたば、殿さまはその親孝行もほめられて、それからはその国で、六十一になつても親ば捨てでこないでもよいことになつたけど。むかしとーびん、さんすけびつたり釜の蓋、灰でみがけがいい銀玉、なあ、さんすけふんはい。

4 長い名の子

むかしあるところに、じんつあそばんつあ、いだっけど。欲しい欲しいと思つた子どもが生まれ、男の子だし、何とかいい名前ないべかど、二人で考えだど。あまり短い名前は、長生きしないど悪いがら、長い名つけんべて、

「チョギチョ、チョギチョ、チョウヤイカイポ、タナツリスボクグリのマタジロウ」

ど付けて、めんごがつて育でいだっけど。そしてだんだん大きくなつて歩くようになつて、遊んでるうちに、井戸さ落ちたじも。じさ、たまげて上げんべと思つたが、梯子ながつたど。まず隣から降りて来と、隣さ行つて、

「おら家のチョギチョ、チョギチョ、チョウヤイカイポ、タナツリスボクグリのマタジロウ、井戸さ落ちたがら、梯子貸してくれ」

といったが、隣のじさ、ちつとキンカであつたもんで、「何だてー」というので、「おら家の、チョギチョ……」なんていつてるうちに、死んでしまつたけど。ほん

だから、あまり長い名はつけるもんでないど。むかしとーぴん、さんすけびったり。

5 田の神団子

昔あるところに、貧乏な家があつて、かがが毎日のように、人の荷物を背負つたりして暮してだつけど。十月十五日は田の神様が山の神様に上がるので、その年のお礼とでも言うか、「団子を上げるのが、うちの方のならわし」。その年も十五日になつたけど。そのかがは団子など、はたいていらんないがらどて、稲の穂を上げて荷背負いに行つたど。そしたら、うしろからピチャピチャと足音がして、「うんが子、火さくべて呉^くつだ。うんが子、火さくべて呉^くつだ」ていうがら、うしろ見ても誰もいながつたど。何だか気いもめで、家さ帰つてみたら、子どもが火傷^{やけど}してであつたど。ほんだから、ずるいことするもんでないど。

付記 川崎みさをさんから、最近書き送られて来たものです。「川崎みさをさんの昔話」に収録した九十一話に加えると、ダブッている「田の神団子」を除いて、九十五話となります。

山形短期大学民話研究センター資料叢書

川崎みさをさんの昔話

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十一年七月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつばの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手ん箱（一） 阿部キヌ才さんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)